

氷見市内遺跡発掘調査概報Ⅷ

園地内急傾斜地崩壊対策工事に伴う園カンデ窯跡試掘調査ほか

付 森寺城跡追加測量調査の成果

2020年3月

氷見市教育委員会

水見市内遺跡発掘調査概報Ⅷ

園地内急傾斜地崩壊対策工事に伴う園カンデ窯跡試掘調査ほか

付 森寺城跡追加測量調査の成果

2020年3月

水見市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、平成29年度から令和元年度に富山県氷見市内において実施した園カンデ窯跡・朝日貝塚（2地点）・泉古墳群（8・9号墳）の試掘調査報告書である。
- 2 あわせて、平成28年度から令和元年度にかけて、氷見市内遺跡詳細分布調査事業に伴う市内丘陵部詳細調査の一環として実施した、森寺城跡追加測量調査の成果についても報告する。
- 3 調査は、市内で計画されている開発行為に伴い、氷見市教育委員会が実施した。
- 4 調査費用は、国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。
- 5 調査期間は、以下のとおりである。

平成29年度　朝日貝塚　　平成29年11月28日（実働1日）

平成30年度　朝日貝塚　　平成30年6月5日（実働1日）

　　園カンデ窯跡　　平成30年6月6日～8日（実働3日）

令和元年度　泉古墳群（8・9号墳）　令和元年6月11日～14日（実働4日）

- 6 調査事務局は、氷見市教育委員会教育総務課（平成28・29年度）、氷見市立博物館（平成30年度・令和元年度）に置いた。事務担当は下記のとおりである。

平成28年度　　教育総務課長：草山利彦、課長補佐：小谷 超、主任学芸員：廣瀬直樹

平成29年度　　教育総務課長：東軒宏彰、課長補佐：小谷 超、主任学芸員：廣瀬直樹

平成30年度・令和元年度　博物館長：大野 究、主任学芸員：廣瀬直樹

- 7 調査および本書の執筆・編集・製図・デジタルトレースは、廣瀬が担当した。また遺物の整理作業は、廣瀬が担当し、平成29年度の試掘調査出土遺物および朝日貝塚採集遺物の実測・拓本・デジタルトレースは、株式会社太陽測地社に、平成30年度の試掘調査出土遺物および園カンデ窯跡採集遺物の実測・拓本・デジタルトレースは、株式会社エイ・テックに、それぞれ委託した。
- 8 平成28年度に実施した園カンデ窯跡の空中写真撮影は、株式会社エイ・テックに委託した。
- 9 泉古墳群の空中写真については、令和元年度に同古墳群の本発掘調査を受注した株式会社太陽測地社より、本発掘調査着手前に撮影した空中写真の提供を受けた。
- 10 令和元年度の試掘調査に先立ち、平成30年度に実施した泉古墳群（8・9号墳）のレーザ測量調査について、アジア航測株式会社に委託した。
- 11 発掘作業員の派遣は公益社団法人富山県シルバー人材センター連合会に委託し、公益社団法人氷見市シルバー人材センターから派遣を受けた。調査に参加した作業員については、第2章以降、調査別に記した。
- 12 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市立博物館が保管している。
- 13 調査および本書の作成にあたり、下記の個人・機関から多大なご教示、ご協力を得た。記して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。

酒井英男、泉 吉紀、富山大学理学部、富山県教育委員会生涯学習・文化財室、富山県氷見土木事務所、富山県高岡農林振興センター、株式会社アーキジオ

目 次

第1章：序説	
第1節：水見市の位置と環境	1
第2節：平成29年度～令和元年度事業の概要	1
第2章：園地内急傾斜地崩壊対策工事に伴う園カンデ窯跡試掘調査	
第1節：遺跡の概要	3
第2節：調査の概要	3
第3節：調査の成果	5
第4節：出土遺物	5
第5節：まとめ	6
第3章：個人住宅建設に伴う朝日貝塚試掘調査	
第1節：遺跡の概要	11
第2節：平成29年度調査地区	11
1. 調査の概要	11
2. 調査の成果	12
第3節：平成30年度調査地区	12
1. 調査の概要	12
2. 調査の成果	12
第4節：出土遺物	14
第4章：一般国道415号（谷屋大野バイパス）道路新設工事に伴う泉古墳群試掘調査	
第1節：遺跡の概要	16
第2節：調査の概要	16
第3節：調査の成果	18
付 章：森寺城跡追加測量調査の成果	
第1節：遺跡の概要	26
第2節：調査に至る経緯	26
第3節：調査の概要	28
第4節：調査の成果	28
引用・参考文献	30
報告書抄録	59

表 目 次

第1表 朝日貝塚（平成29年度調査地区） 基本層序	12
第2表 朝日貝塚（平成30年度調査地区） 基本層序	13

挿 図 目 次

第1図 調査対象地位置図	2
第2図 園カンデ窯跡位置図	3
第3図 園地内急傾斜地崩壊対策工事対象地位置図	4
第4図 園カンデ窯跡試掘トレンチ位置図	4
第5図 園カンデ窯跡試掘トレンチ平面図・土層断面図	7
第6図 園カンデ窯跡試掘調査出土遺物実測図	7
第7図 園カンデ窯跡表採遺物実測図（1）	8

第8図	圓カンデ窯跡表採遺物実測図（2）	9
第9図	圓カンデ窯跡表採遺物実測図（3）	10
第10図	朝日貝塚位置図	11
第11図	朝日貝塚試掘トレンチ等位置図	13
第12図	朝日貝塚試掘調査出土遺物・表採遺物実測図	15
第13図	泉古墳群位置図	16
第14図	泉9号墳（鶴塚）出土玉類	16
第15図	一般国道415号（谷屋大野バイパス）道路改築事業調査対象地位置図	17
第16図	泉古墳群試掘調査対象地位置図	18
第17図	泉古墳群赤色立体地図	20
第18図	泉古墳群墳丘分布図	21
第19図	泉古墳群赤色立体地図（俯瞰・北西から）	22
第20図	泉8・9号墳赤色立体地図	22
第21図	泉8・9号墳平面図	23
第22図	泉8・9号墳試掘トレンチ平面図	24
第23図	泉8・9号墳試掘トレンチ土層断面図	25
第24図	森寺城跡および周辺の城跡位置図	27
第25図	森寺城跡追加測量調査対象地位置図	29
第26図	森寺城跡追加測量A地点平面図	31
第27図	森寺城跡追加測量A地点断面図	33
第28図	森寺城跡追加測量B地点平面図	35
第29図	森寺城跡追加測量B地点断面図	37
第30図	森寺城跡全体平面図	39

写真図版目次

カラー図版1	圓カンデ窯跡空中写真（1）	41
	1. 圓カンデ窯跡上空から旧布勢水海と朝日長山古墳を見る（南西から）	
	2. 朝日長山古墳上空から圓カンデ窯跡を見る（北から）	
カラー図版2	圓カンデ窯跡空中写真（2）	42
	1. 圓カンデ窯跡近景（西から）	
	2. 圓カンデ窯跡近景（上から）	
カラー図版3	圓カンデ窯跡遺物写真（1）	43
カラー図版4	圓カンデ窯跡遺物写真（2）	44
カラー図版5	圓カンデ窯跡遺物写真（3）	45
カラー図版6	圓カンデ窯跡遺物写真（4）	46
カラー図版7	泉古墳群空中写真（1）	47
	1. 泉8・9号墳遠景（東から）	
	2. 泉8・9号墳遠景（西から）	
カラー図版8	泉古墳群空中写真（2）	48
	1. 泉古墳群近景（北西から）	
	2. 泉8・9号墳近景（上から）	
図版1	遺跡周辺空中写真（1）	49
図版2	遺跡周辺空中写真（2）	50
図版3	圓カンデ窯跡試掘調査（1）	51
	1. 調査対象地近景（南から）	
	2. T1完掘状況（北から）	

	3. T 2 完掘状況（北西から）	
図版 4	園カンデ窯跡試掘調査（2）	52
	1. 作業風景	
	2. 調査対象地工事実施状況（1）（令和元年10月、北西から）	
	3. 調査対象地工事実施状況（2）（令和元年10月、南西から）	
図版 5	朝日貝塚（平成29年度調査地区）試掘調査	53
	1. T 1 完掘状況（西から）	
	2. T 2 完掘状況（南から）	
	3. 作業風景	
図版 6	朝日貝塚（平成30年度調査地区）試掘調査	54
	1. 調査対象地近景（北から）	
	2. 伐根部土層断面（東から）	
	3. 作業風景	
図版 7	朝日貝塚遺物写真（1）	55
図版 8	朝日貝塚遺物写真（2）	56
図版 9	泉古墳群（8・9号墳）試掘調査（1）	57
	1. 調査対象地近景（北東から）	
	2. 9号墳頂部土坑検出状況（北から）	
	3. 9号墳溝状遺構検出状況（東から）	
図版 9	泉古墳群（8・9号墳）試掘調査（1）	58
	1. T 3 完掘状況（北東から）	
	2. 作業風景	
	3. 出土遺物	

第1章 序 説

第1節 氷見市の位置と環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にある。昭和27年の市制施行から昭和29年までに旧太田村（現、高岡市太田）を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km²、人口は約4万7千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300～500mの丘陵に取り囲まれ、これら丘陵から派生する小丘陵により、西条・十三谷・上庄谷・八代谷・余川谷・瀧浦の6つの区域に分けられる。また市の東側は、約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。市の北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外はまとまった平野が少ない。一方、市の南半部は、主として布勢水海（十二町潟）が堆積してできた平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる（氷見市1999・2000）。

第2節 平成29年度～令和元年度事業の概要（第1図・図版1・2）

平成29年度には3件、平成30年度には8件、令和元年度には1件の試掘調査を実施した。そのうち平成29年度の2件と平成30年度の6件については、昨年度の調査概報で報告済みであるため、そちらを参照されたい（氷見市教育委員会2019）。

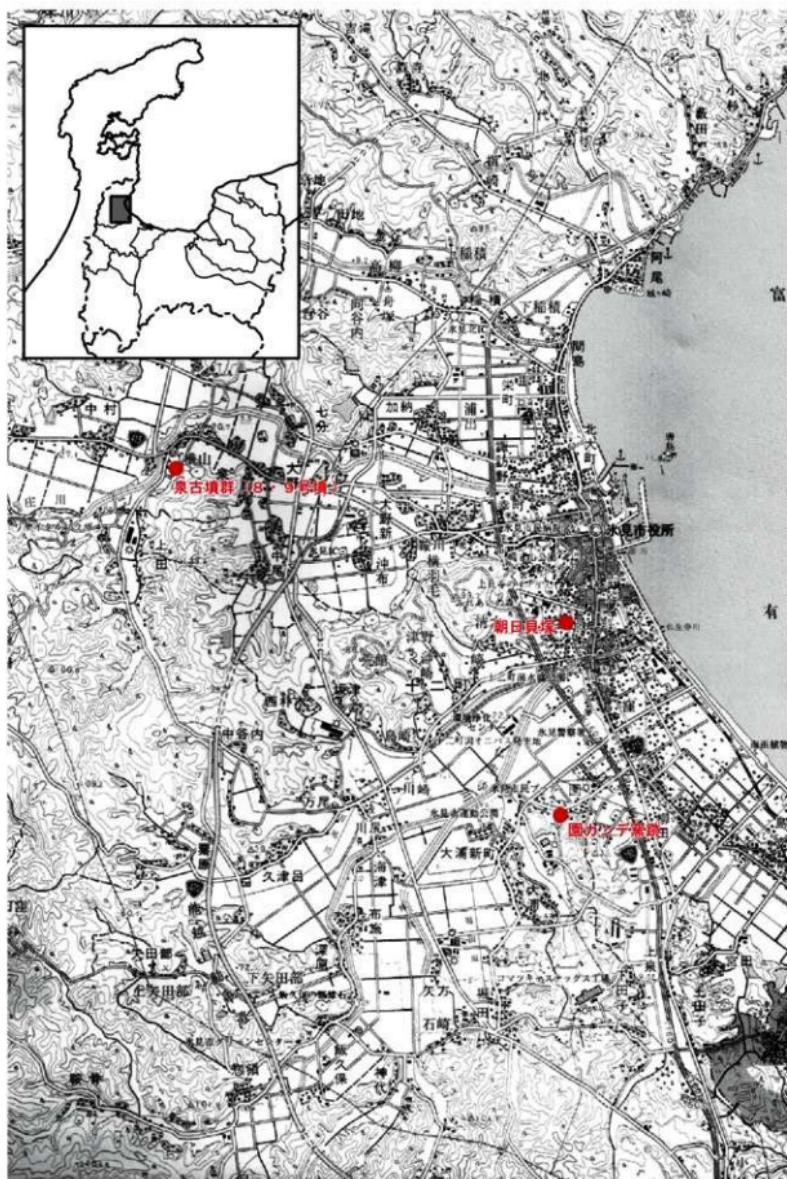
本書では、以下4件の試掘調査の成果について報告する。

公共事業に伴う試掘調査としては、平成30年度に富山県氷見土木事務所より依頼を受けた園地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う園カンデ窓跡試掘調査、令和元年度には同じく富山県氷見土木事務所より依頼を受けた一般国道415号（谷屋大野バイパス）道路新設工事に伴う泉古墳群（8・9号墳）試掘調査、計2件の試掘調査を実施した。なお、これらの試掘調査に先立ち、平成28年度には園カンデ窓跡の工事対象地周辺の理化学探査（磁気探査）、平成30年度には泉古墳群（8・9号墳）周辺地形のレーザ測量調査をそれぞれ実施した。

また、個人住宅建設に先立ち、平成29年度と同30年度にそれぞれ1件ずつ、朝日貝塚の試掘調査を実施した。

なお、平成29年度から令和元年度の埋蔵文化財試掘調査事業の実施にあたり、国庫と県費の補助を受けた。本文の執筆、図面トレース作業等、報告書作成に関する業務については、令和元年12月から実施した。

一般国道415号（谷屋大野バイパス）道路新設工事に伴う泉古墳群（8・9号墳）試掘調査については、その調査成果を受け、引き続き令和元年度に本発掘調査を実施した。この本発掘調査の概要については令和2年度に調査報告書の刊行を予定している。試掘調査の成果とは一部整合しない箇所があるため、本書では試掘調査の成果について、その概要を記すのみに留めた。



第1図 調査対象地位置図 (S=1/50,000)

第2章 園地内急傾斜地崩壊対策工事に伴う園カンデ窯跡試掘調査

第1節 遺跡の概要（第2図・カラー図版1・2・図版1）

調査対象の園地区は、市域南部に位置する。園カンデ窯跡は、仏生寺川の右岸、二上丘陵から北に広がる台地の最も平野部に張り出した丘陵北端部に位置する。窯跡は、昭和63年丘陵一帯の製鉄遺跡の踏査中に発見された。周辺の丘陵は標高約35m前後で、起伏に富む。丘陵北側の平野部は標高1m前後の低湿地で、十二町潟に続いている。この辺りがかつて「布勢水海」とよばれた潟湖の名残である。

窯跡は、北に開く浅い谷の東側で、西向きの斜面にある。谷奥にはこの谷をせきとめて築いた浦池があり、その築堤時に土取りされた斜面に、灰原の須恵器や窯壁片がみられる。分布の範囲は標高7~11mにわたる。斜面下部、水田面の標高は約5mである。

当地で表採された須恵器には、焼き歪みや焼き膨れがみられ、溶着したものもある。器表面は暗灰色から灰褐色で、焼き締めの良いものには断面がセピア色となるものがある。その操業は6世紀前半頃と考えられ、古墳時代の須恵器窯として、富山県内では現時点で最古に位置付けられる。

なお、園カンデ窯跡と同時期の古墳として、窯跡とは「布勢水海」を挟んで対岸に位置する朝日長山古墳がある（カラー図版1・図版1）。朝日長山古墳でも6世紀前半の須恵器が出土しているが、園カンデ窯跡で生産された資料は確認されていない（氷見市2002）。



第2図 園カンデ窯跡位置図 (S=1/25,000)

第2節 調査の概要（第3・4図）

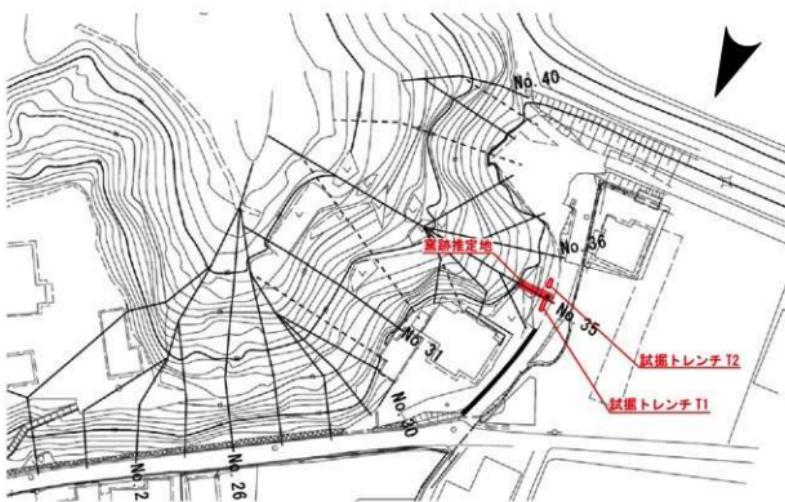
平成28年度、園地区で急傾斜地崩壊対策工事が計画されていることを確認したため、当地に所在する園カンデ窯跡の保護に関して、氷見市教育委員会と富山県氷見土木事務所の間で協議を行った。その結果、工事対象地は、窯跡が立地する丘陵部の北から西側にかけての縁辺部だったことから、工法の変更も含め、窯跡の保護を優先した対応とすることを申し入れた（第3図）。

協議と並行し、平成28年度には、国庫補助事業の一環として、窯体の位置推定のための磁気探査と表採遺物の図化を実施した。磁気探査については、富山大学理学部に委託した。磁気探査では、計画範囲のうち、南北を開削された宅地に挟まれ、西側が農道に面する舌状部で比較的強い磁気異常を確認し、窯体が存在する可能性が指摘された（第4図）。

氷見土木事務所との協議によって、丘陵斜面の開削を作工法から、比較的掘削面積が少なくて済む崩壊土砂防止柵への設計変更がなされることになった。だが、窯跡の存在が推定された舌状部の西端は、農道に接していることから削平せざるを得ないと判断された。そのため、当該地については試掘調査の対象とすることで調整した。平成29年度以降、窯跡の保護に問題がない範囲から急傾斜地崩壊対策工事が進められ、試掘調査は平成30年度に実施することになった。



第3図 園地内急傾斜地崩壊対策工事対象地位置図 (S=1/2,000)



第4図 園カンデ窓跡試掘トレンチ位置図 (S=1/1,000)

調査の概要は以下のとおりである。

実施年度：平成30年度

所在地：氷見市園字上手

調査対象面積：63m²

発掘面積：3.6m²

調査主体：氷見市教育委員会

調査担当者：氷見市教育委員会 氷見市立博物館 主任学芸員 廣瀬 直樹

発掘作業員：小畠 政昭・柿谷 健二・清水 不二雄

調査期間：平成30年6月6日～8日（のべ3日）

調査原因：園地内急傾斜地崩壊対策工事

調査方法：調査対象地の崖面に平行する試掘トレンチT1・2の計2基を設定し、発掘作業員による人力で掘削を行った。なお、トレンチ位置は、平成28年度に実施した周辺の磁気探査（受託者：富山大学理学部）の結果、窯跡の存在が推定された範囲で、擁壁施工による掘削が計画されている範囲とした。なお窯跡推定地近くに立ち木があったため、その南北にT1、T2の計2基のトレンチを設定した。

第3節 調査の成果（第4・5図・図版3・4）

東西にのびる窯跡推定地の北側に設定したT1では、廃材が投棄されている様子を確認した。その中には一輪車の部品など屑鉄類も含まれており、それが磁気探査で反応した可能性が高い。

一方、南側に設定したT2では、表土層から須恵器片1点のほか、鉄滓が出土した。地山は褐色の砂層で、遺構は確認できなかった。また、調査区周辺では、須恵器や窯壁片、鉄滓などを表面採集した。

第4節 出土遺物（第6～9図・カラー図版3～6）

試掘調査で確認した遺物6点を第6図に図示した。いずれも古墳時代の須恵器で、試掘トレンチT2表土層から出土した6を除き、農道に面した法面からの表採資料である。

1は筒形器台の受け部か。口縁部にかけて外傾するが、破片端部が焼き膨れでいるため、その影響で器形が歪んでいる可能性がある。外面には櫛描波状文が施される。2は杯蓋で、焼き膨れが著しい。3～6は壺瓶類の体部破片である。3は焼成不良でやや軟質の焼き上がりを呈する。4は焼き膨れが著しい。

なお、試掘調査で出土した窯壁片1点および鉄滓11点については、カラー図版6に写真を掲載した。

①は窯壁片で、片面がガラス化する。②～⑫は鉄滓である。

第7～9図には、これまで園カンデ窯跡で表採され、氷見市立博物館が所蔵している須恵器69点の実測図を掲載した。なお、細片のため実測できないものなどは除外した。

7～28は蓋杯の杯蓋と杯身である。この中には杯蓋と杯身が溶着した資料があり（7・16・19）、蓋と身がセットで焼成されたと考えられる。

29～37は壺瓶類である。29は焼き膨れた直口壺の口縁部で、外面に櫛描波状文を施す。32は、一見壺瓶類の肩部破片だが、胴部に孔ないし透かしがあり、甕や器台などの可能性がある。36は焼成不良で土師質となったもので、摩滅が著しい。

38は、平成28年度に現地確認をした際、後に試掘調査対象地となる農道横の法面で採集した資料である。筒形器台などの可能性がある球状の体部に透かしを持つ破片で、外面には4条の櫛描波状文を施す。39はすり鉢で、口縁部と底部を欠く。厚手の器壁を持ち、外面にカキメを施す。

40～75は壺壺類の破片である。43は底部近くの破片で、薄手の器壁を持ち焼成は良好だが、下端部が大きく焼き彫れる。75は、焼き重んだ壺の体部破片に焼き彫れた杯蓋が溶着した資料である。大多数は焼成良好で、外面が暗灰色から暗青灰色、断面はにぶい赤褐色を呈するが、一部に焼成不良で土師質の焼き上がりのものがある（44・45・50・59・66・67・73・74）。

これら圓カンデ窯跡の須恵器は、焼き彫れが著しいもの（1・2・4・7・8・14～16・20・21・26・27・29～31・41・43）、他個体と溶着したもの（7・16・19・37・75）がある、焼き締めの良い資料については、器壁の表面は暗灰色から暗青灰色を呈するが、断面はにぶい赤褐色を呈する、などの特徴がある。

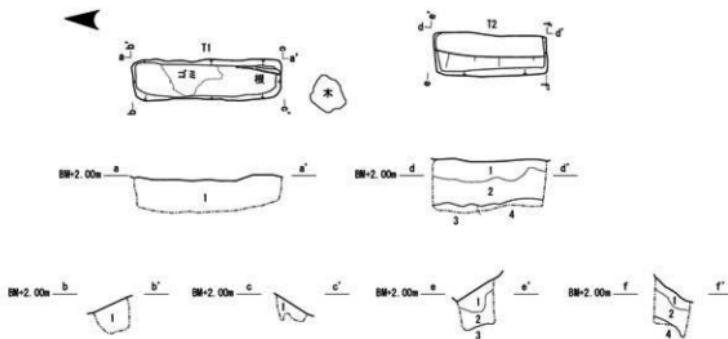
圓カンデ窯跡と同様の特徴を持つ須恵器は、先述したように、同じく6世紀前半と考えられる朝日長山古墳では出土していない。一方で、よく似た特徴を持つ須恵器が、氷見市内の神代羽連遺跡で確認されているほか、近年では鞍川E遺跡や鳥尾遺跡、柳田遺跡でもごく少量だが出土している（氷見市2002・氷見市教育委員会2012・2019）。その需給関係については、今後も資料の増加を待つ必要があろう。

第5節　まとめ

今回の調査では、遺構は確認されず、窯跡を推定する磁気探査の結果についても投棄された廃材が反応したものと推測された。だが、工事対象地の周辺から須恵器や鉄滓などが出土しており、近辺に窯跡が存在する可能性は捨てきれないと考えた。また、立ち木のために調査できない場所もあったことから、工事の施工にあたって本発掘調査は不要ではあるものの、土砂掘削の際に氷見市教育委員会の調査員が立ち会う必要があると判断した。

こうした判断に基づき、令和元年度には当該地の工事の際に立会調査を行ったが、工事範囲に窯跡は存在しないことが確認された（図版4-2・3）。

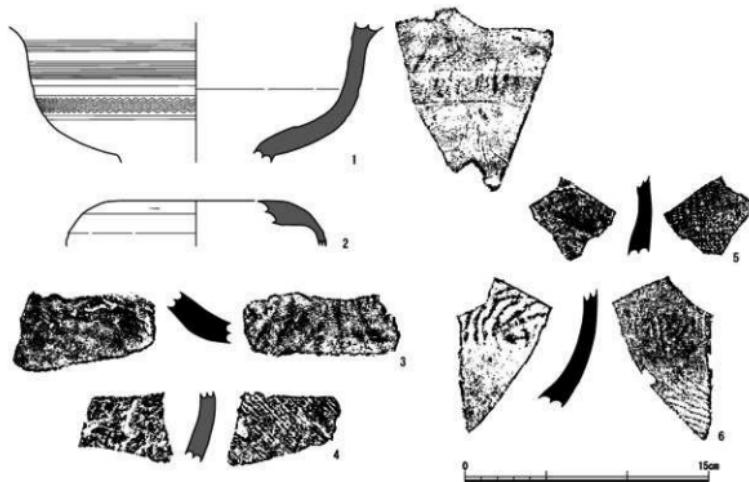
窯跡が発見された当初、須恵器片や窯壁片が確認されたのは浦池築堤時に土取りされた斜面である。その斜面は調査対象地の東側に位置する。築堤時の土取りやその後の宅地造成によって地形は改変されているが、窯跡の主体はその近辺に残されている可能性が高い。



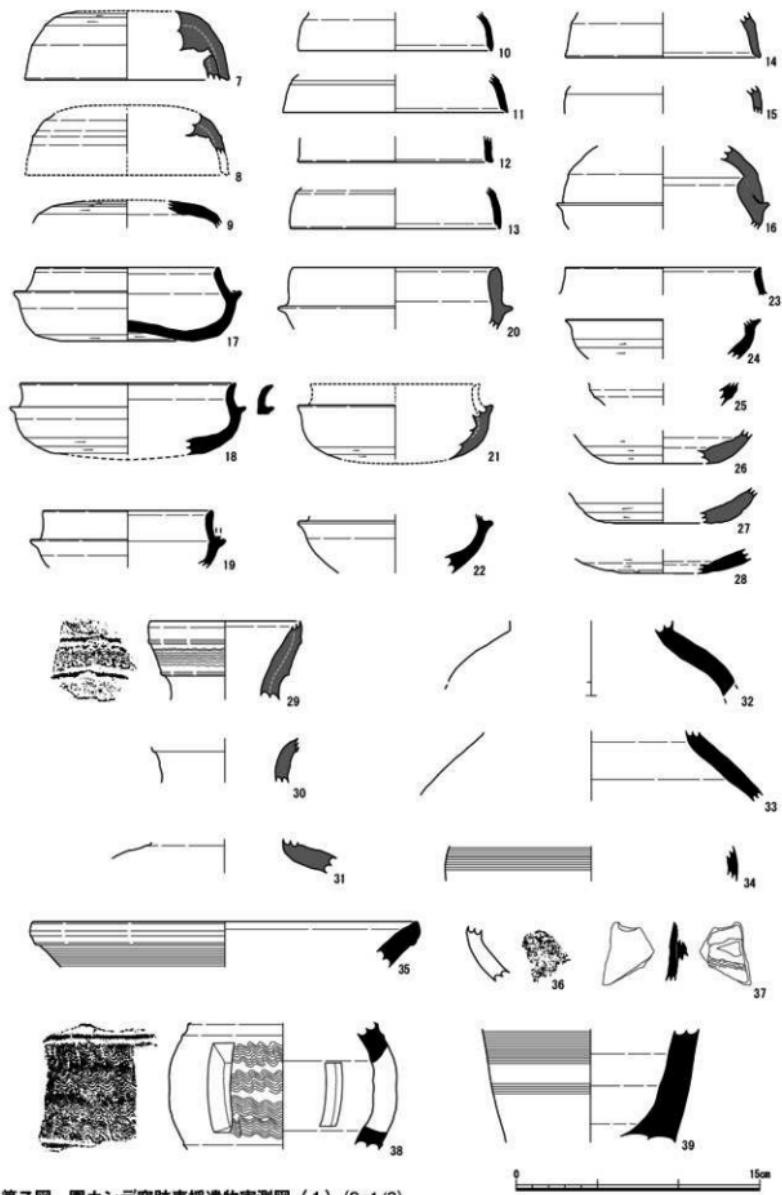
- 1: Hu10YR3/2 黒褐色砂質土、ゴミ多く混じる（表土）
 2: Hu10YR4/4 棕色砂質土、3cm大の礫（川原石）混じる
 3: Hu10YR4/6 棕色砂（地山）
 4: Hu7.5YR5/6 明褐色砂（地山）

0 3m

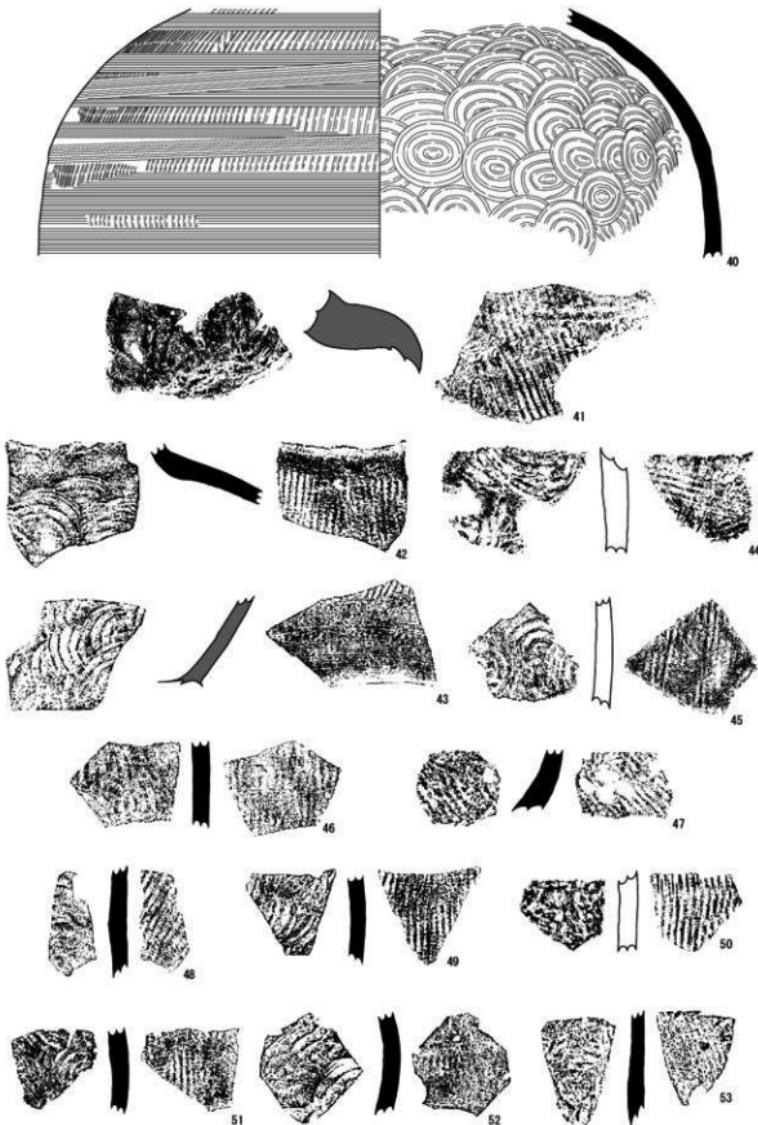
第5図 園カンデ窯跡試掘トレンチ平面図・土層断面図 (S=1/80)



第6図 園カンデ窯跡試掘調査出土遺物実測図 (S=1/3)

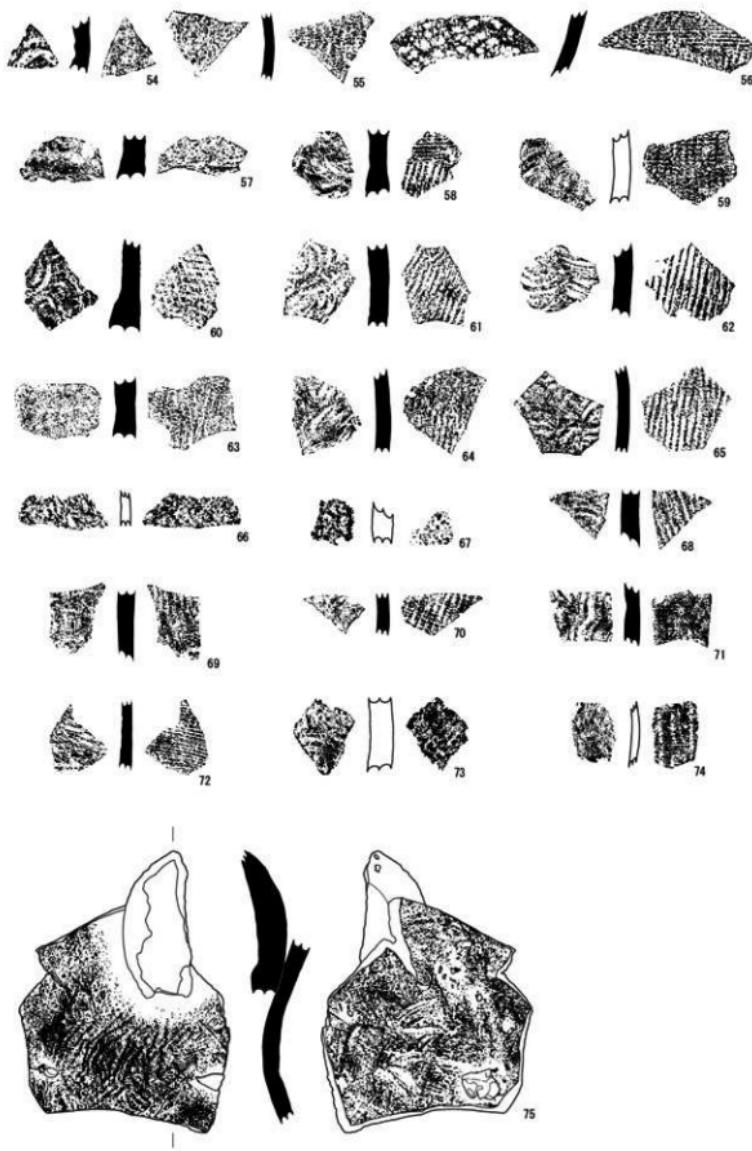


第7図 圓カンデ窯跡表探遺物実測図（1）(S=1/3)



第8図 園カンデ窯跡表探遺物実測図（2）(S=1/3)





第9図 園カンデ窯跡表採遺物実測図（3）（S=1/3）



第3章 個人住宅建設に伴う朝日貝塚試掘調査

第1節 遺跡の概要（第10図・図版1）

朝日貝塚は、氷見市市街地の南西部に横たわる東西に延びた朝日山丘陵の東南端、標高33mの湯山と呼ばれる丘の東麓台地にある。この台地は、東西が北部で広く南部で狭まる、標高が丘陵辺で約7mの低台地である。現在の汀から直線距離で約800mの位置にある。

大正7年、臨済宗国泰寺派の誓度寺を建立する際に発見された朝日貝塚は、大正11年には誓度寺境内を中心とする範囲が国の史跡指定を受けた。指定後には、指定地周辺の別地点でも遺物の出土が確認された。そのため、指定地周辺をA地点、指定地北側にB・C地点、東側の低地

をD地点として、周辺一帯が埋蔵文化財包蔵地としての朝日貝塚の範囲となっている。史跡指定地のA地点では、2層の貝層のはか、縄文前期末および縄文中期の2時期にわたる炉跡を持つ住居床面が検出されている。また、下側の貝層下の黒色砂層から出土した細い粘土紐を貼り付けるなどの特徴を持つ土器群は、「朝日下層式」として北陸の縄文時代前半期の標準遺跡になっている。包蔵地では、縄文時代のほか弥生時代末から古墳時代初め、さらに古代から中世の遺物も出土している。

今回調査対象となった2地区は、いずれも史跡指定範囲の北側のC地点にあたる。大正末期から昭和初期頃の区画整理中に縄文時代前期前半の遺物が出土したというが、採土によって東側のB地点と共に消滅したとされる（氷見市2002）。

第2節 平成29年度調査地区

1. 調査の概要

所 在 地：氷見市朝日丘

調査対象面積：456.1m²

發 墓 面 積：9.0m²

調 査 主 体：氷見市教育委員会

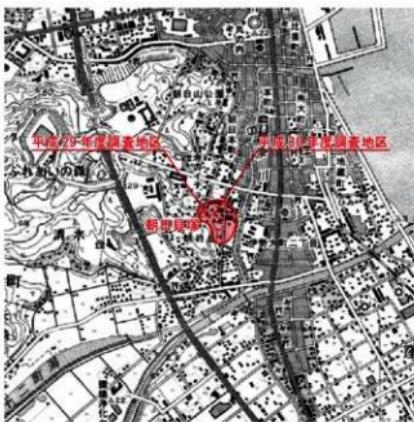
調査担当者：氷見市教育委員会 教育総務課 主任学芸員 廣瀬 直樹

発掘作業員：柿谷 健二・小島 俊文・清水不二雄

調査期間：平成29年11月28日（のべ1日）

調査原因：個人住宅建設

調査方法：試掘トレンチ2基を設定して人力による掘削を行った。



第10図 朝日貝塚位置図 (S=1/25,000)

2. 調査の成果（第11図・第1表・図版5）

調査対象地は、朝日貝塚の国史跡指定地外にあたる北西側の一画、いわゆるC地点と呼ばれる範囲で、昭和初年頃までの区画整理で縄文時代の包含層は消滅したと伝わる。また、対象地には過去に個人住宅が建設されており、現在は解体され更地となっている。

調査では、対象地のうち、畑として利用されていた東側の部分に試掘トレンチ2基を設定し掘削を行った。どちらのトレンチも、かつて建築されていた家屋の廃材などを多く含む表土層の下に、現代の瓦礫とともに縄文から中世の遺物を包含する層があり、さらにその下で暗灰黄色砂層の地山が検出される。地山に掘り込む溝や土坑を検出したが、遺構内からガラス片が出土しており、後世の搅乱と判断した。

本地区周辺は、縄文時代前期の遺物が出土した朝日貝塚C地点だが、大正末から昭和初め頃の区画整理で削平、消滅したとされる。今回の調査でも、貝塚の基盤となる地山層である暗灰黄色砂層を検出したが、その直上は廃材混じりの造成土で覆われる。やはり、区画整理によって地山まで削平された後に、盛土されたものと考えられる。よって、本発掘調査は不要と判断した。なお、その後の計画変更により、当地には現在も住宅は建設されず、更地のままである。

第1表 朝日貝塚（平成29年度調査地区） 基本層序

I層	表土	35～40cm	暗褐色砂質土、廃材・炭化物等混じる
II層	造成土	15～20cm	黒褐色砂質土、廃材・炭化物少量混じる
III層	地山		暗灰黄色砂、湧水あり

第3節 平成30年度調査地区

1. 調査の概要

所 在 地：水見市朝日丘

調査対象面積：240.14m²

発 掘 面 積：6.0m²

調 査 主 体：水見市教育委員会

調査担当者：水見市教育委員会 水見市立博物館 主任学芸員 廣瀬 直樹

発掘作業員：柿谷 健二・清水不二雄

調 査 期 間：平成30年6月6日（のべ1日）

調 査 原 因：個人住宅建設

調 査 方 法：切り株伐根部2か所について、人力による掘削を行った。

2. 調査の成果（第11図・第2表・図版6）

調査対象地は、朝日貝塚の国史跡指定地外にあたる北側一画で、平成29年度調査地区と同じく、区画整理によって削平された範囲である。今回、個人住宅の建設に先立ち、史跡指定地と建設予定地の間に擁壁が設置されることになった。当初は、史跡指定地の一部を掘削し、擁壁を施工する計画だったことから、富山県教育委員会を通じて文化庁とも協議を実施した。その結果、掘削を要する施工については現状変更が許可されない見込みとなった。それを受けて工務店を通じて施主側と協議し、擁壁については既製品の設置に工法を変更することで掘削は不要とし、通常の埋蔵文化財包蔵地として以後の対応を進めることになった。新たに計画された工法では、史跡指定地内の掘削はなくなったものの、建設予定

地背後の指定地と隣接する残丘部については、立ち木の切り株を伐根した後に整地が必要となった。そこで、伐根作業の立会調査と、伐根部の試掘調査によって対応することとした。

調査に先立つ5月29日に切り株の抜根作業が行われた。その後、6月5日に試掘調査として抜根部2か所の壁立てを行い、層位の確認と遺物の残存状況の確認を行った。また、一部既存の木製擁壁を取り外した残丘東面についても層位の確認を行った。

調査では、残丘の下部で褐色砂層の地山を検出した。その直上に黒褐色砂質土層があるが、この層からは樹木の根や廃材等に混じって縄文土器や弥生土器、古代須恵器のほか、近現代陶磁器類などが出土した。残丘部については、土地区画整理以前の旧地形を残す可能性を考慮していたが、実際には地山直上まで大きく擾乱を受けている状況を確認することができた。残丘については、住宅建設に伴って整地されるが、その作業には問題がないと判断した。

第2表 朝日貝塚（平成30年度調査地区） 基本層序

I層	表土	45 ~ 80 cm	黒褐色砂質土、土器・ガラス片・近現代陶磁器・ビニール片等混じる
II層	地山		褐色砂、かたくしまる



第11図 朝日貝塚試掘トレンチ等位置図 (S=1/1,500)

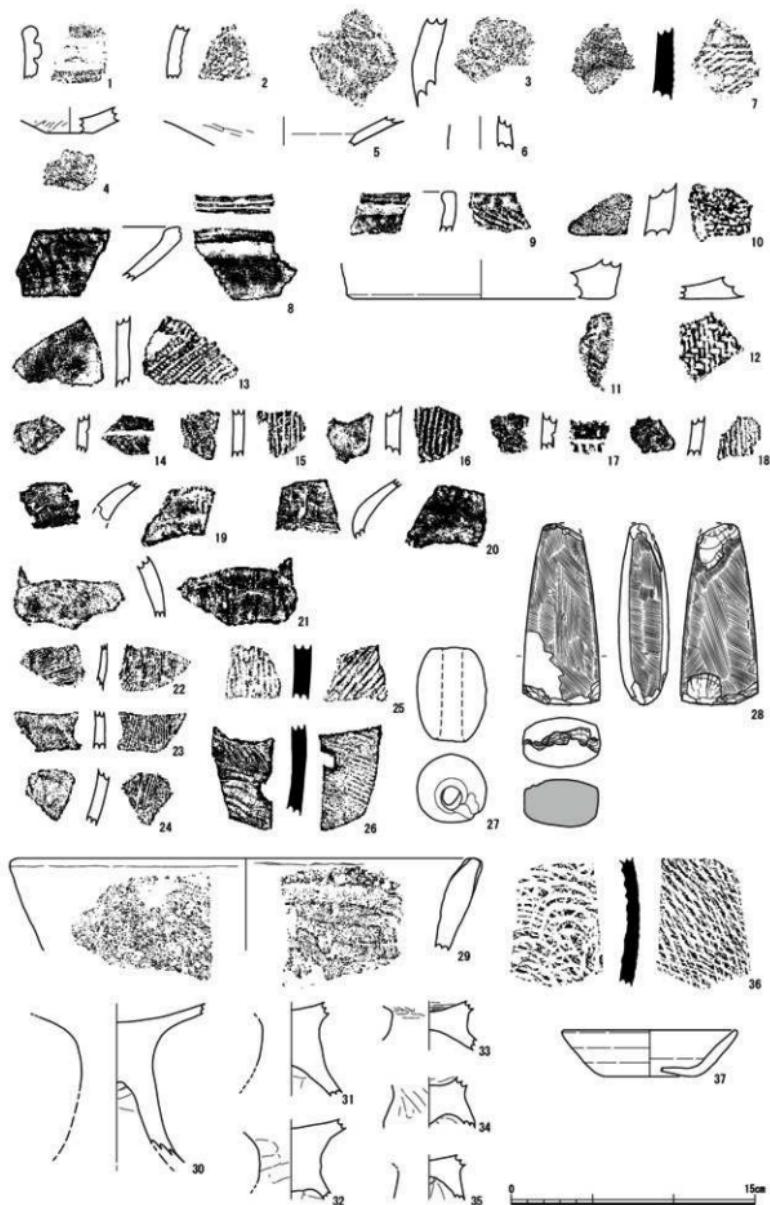
第4節 出土遺物（第12図・図版7・8）

2か年の試掘調査で出土した遺物のうち主なものを第12図に図示した。また、あわせて朝日貝塚で過去に採集された遺物についても同じく図示した。

1～7は平成29年度調査の出土遺物である。1～4は縄文土器。1は浅鉢の口縁部である。前期前半のものか。2・3は深鉢の体部破片、4は底部破片である。5・6は弥生土器の高杯ないし器台で、5は杯部、6は脚部である。7は中世珠洲焼壺類の体部破片で、外面に平行叩き痕が残る。

8～28は平成30年度試掘調査の出土遺物である。8～18は縄文土器。8は浅鉢の口縁部で、口縁部外面に2条の沈線を施す。9は深鉢の口縁部。10および13～18は体部破片である。16・17は外面に条痕文を施す。18は沈線の下に刺突文を施す。11は深鉢の底部で、底径15.7cmを測る。12は深鉢の底部で底外面に網代圧痕を残す。19～24は弥生土器。19は高杯ないし壺で、内外面横ナデ調整を施す。20は高杯で、内外面ハケメ調整を施す。21～24は体部破片で、22は外面ハケメ調整、23・24は外面ハケメ、内面がナデ調整である。25・26は古代須恵器の壺類体部破片である。25は外面に平行叩き痕、内面に平行当て具痕が残る。26は外面に平行叩き痕、内面に同心円状當て具痕が残る。27は土錘である。全長5.8cm、最大幅4.3cm、孔径1.3cmを測り、重量68.43gを量る。28は磨製石斧。蛇紋岩性で、最大長11.1cm、最大幅4.7cm、最大厚3.0cmを測り、重量265.5gを量る。

29～37は朝日貝塚で過去に表採された遺物である。主な採集地点は、指定地（誓度寺境内）の南側の畠地である。地元の方によって土器や石器等が採集され、氷見市立博物館に寄贈された。そのうち9点を図示した。29は縄文土器深鉢の口縁部で、口径28.2cmを測る。内外面ともナデ調整を施す。30～35は弥生土器高杯の脚部である。摩耗が著しいものが多いが、33は杯部内面と外面の一部にミガキ調整が残る。36は古代須恵器の壺体部破片で、外面に平行叩き痕、内面に同心円状當て具痕が残る。37は土師器杯である。口径10.5cm、器高2.8cm、底径5.5cmを測る。



第12図 朝日貝塚試掘調査出土遺物・表探遺物実測図 (S=1/3)

第4章 一般国道415号（谷屋大野バイパス）道路新設工事に伴う泉古墳群試掘調査

第1節 遺跡の概要（第13・14図・カラー図版7・8・図版2）

調査対象の泉地区は、上庄川中流の南岸に位置する。北および東方に平野が広がり、西南方には丘陵地が連なる。

泉古墳群は、丘陵最高所に位置する直径45mの1号墳（高塚）をはじめ、25基の古墳から構成される。古墳時代前期から後期まで続く古墳群である。

調査対象となるのは、8号墳および9号墳（鶴塚）の2基である。8号墳は、丘陵を横断する道路開削面に周溝が表れているとされる。9号墳（鶴塚）は、直径11~12mの円墳と考えられ、大正期に開墾によって遺物が発見された。大正11年には地元の青年団による発掘が行われたが、その際には遺物は出土しなかったといふ。墳頂部は、かつて発掘時の凹みがあったが、現在は埋め戻されている。9号墳（鶴塚）の出土遺物としては、水晶

製切子玉（第14図1）、ガラス小玉（第14図2~6）、碧玉製管玉、土器があり、切子玉の出土から6世紀代の後期古墳と考えられる（氷見市2002）。

調査対象地は、古墳群北側で、西に上庄川を見下ろす丘陵端部に位置する。現況は山林である。標高は、9号墳の墳頂部で約19.5mを測る。調査対象地南側の尾根筋には、方墳の21号墳と前方後方墳の22号墳が並ぶ。本来はこの尾根筋の末端に今回の調査対象地が位置するが、現況では道路の開削によって分断されている。また、調査対象地の北東側の細長い丘陵には12~15号墳が並び、北には自然地形の可能性がある10号墳と11号墳が所在する。

第2節 調査の概要（第15~21図）

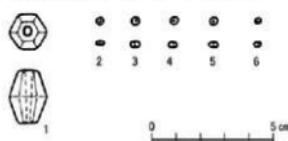
一般国道415号（谷屋大野バイパス）道路新設工事に伴う埋蔵文化財試掘調査は、平成23年度より、用地取得等の進捗に合わせて順次実施してきた。令和元年度には、一連の埋蔵文化財試掘調査の最終となる泉古墳群8・9号墳の試掘調査を実施することになった（第15・16図）。

令和元年度の試掘調査実施に先立ち、前年の平成30年度には、泉8・9号墳周辺の測量調査を実施した。この測量調査では、平成30年度に富山県高岡農林振興センターが実施した氷見市域のレーザ測量成果を利用し、現地で補足測量調査を実施した上で赤色立体地図（微地形表現図）を作成した。さらに、そのレーザ測量成果と地形測量のデータを使用して、平面図の作成を行った（第17~21図）。

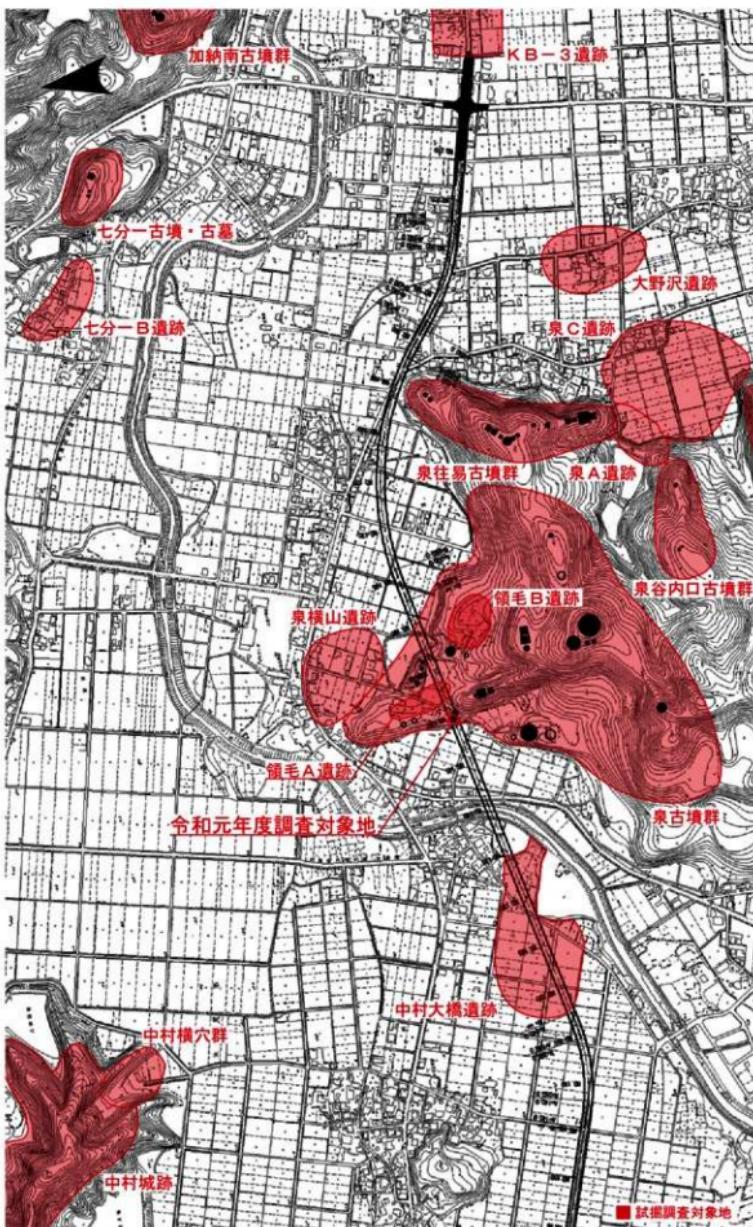
続く令和元年度には、前年度に作成した平面図を基に試掘トレーンチを設定し、試掘調査を実施した。



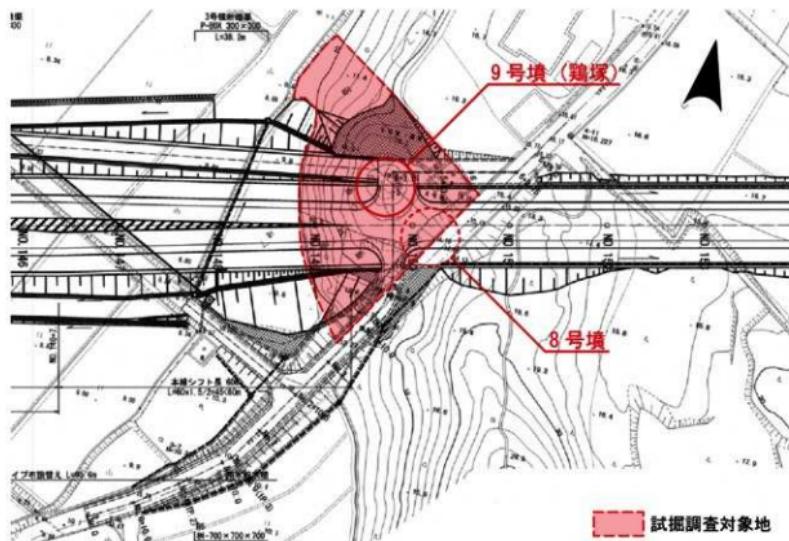
第13図 泉古墳群位置図 (S=1/25,000)



第14図 泉9号墳（鶴塚）出土玉類 (S=1/2)
(氷見市2002より転載)



第15図 一般国道415号（谷屋大野バイパス）道路改築事業調査対象地位置図（S=1/10,000）



第16図 泉古墳群試掘調査対象地位置図 (S=1/1,000)

令和元年度に実施した泉古墳群8・9号墳試掘調査の概要は以下のとおりである。

実施年度：令和元年度

所在地：水見市泉字亥島

調査対象面積：1181.16m²

発掘面積：32.3m²

調査主体：水見市教育委員会

調査担当者：水見市教育委員会 水見市立博物館 主任学芸員 廣瀬 直樹

発掘作業員：小田 信人・小畠 政昭・垣地 義勝・菊地 栄作・小島 俊文・多胡 信夫・

茶木 彰・船山 実・宮下 清光

調査期間：令和元年6月11日～14日（のべ4日）

調査原因：一般国道415号（谷屋大野バイパス）道路新設工事

調査方法：試掘トレンチを3基設定し、発掘作業員による人力で掘削を行った。

第3節 調査の成果（第22・23図・図版9・10）

9号墳（鶴塚）には、墳丘規模および大正11年の掘削坑の土層確認を目的として、L字形の試掘トレンチT1とT2の2基を設定した。うちT2の南東側は、8号墳の想定範囲まで伸びるものとした。また、調査区東側の平坦面に、8号墳の周溝を確認するためのトレンチT3を設定した。

9号墳の墳頂部は、かつては掘削坑があり、その後埋め戻されたものの凹みが残る。T1・T2を設

定して表土の掘削を行ったところ、大正11年に地元青年団が実施した発掘の際の掘削坑と推測される土坑が検出された。また、9号墳の東側に設定したトレンチT2の南東部では、斜面中程および斜面下部で計2条の溝状遺構を確認した。

試掘調査の段階では、他のトレンチで確認できた墳丘裾部や等高線を考慮して、斜面中ほどの溝状遺構を周溝の可能性が高いと判断した。その場合、9号墳は、北東側がやや崩れた直径10m程度の円墳となる。

また、9号墳から8号墳に伸びるトレンチT2の南東端では、黄褐色土の地山と、地山に掘り込まれたピットを確認した。

トレンチT3については、黒褐色腐植土を30cm程度掘削し、暗褐色粘質土層を検出したが、地山の岩盤層は確認できなかった。試掘調査では8号墳を確認できず、残存していたとしてもかなりの部分が削平されている可能性が高いと判断した。

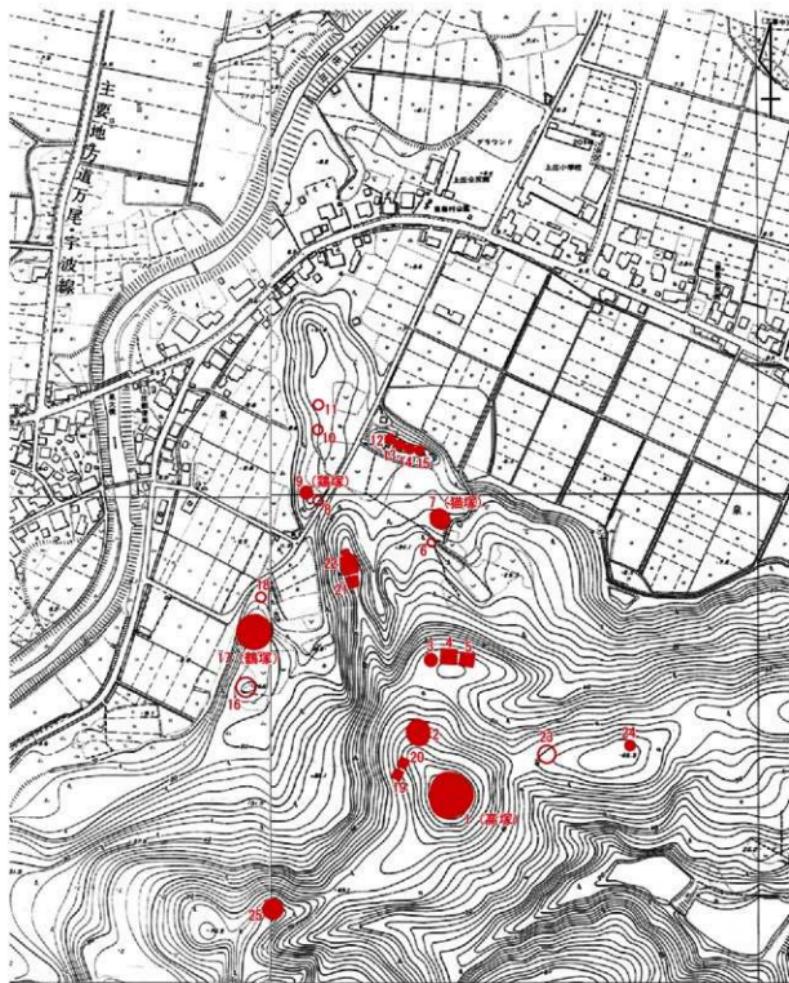
出土遺物としては、試掘トレンチから古代須恵器が2点出土した。9号墳北西側の試掘トレンチT1の北西端では、墳丘の裾にあたる場所の表土から須恵器広口壺の口縁部破片（図版10-3-1）が出土した。またT3の表土から、突帯と耳が付属する瓶類の肩部破片（図版10-3-2）が出土した。どちらの須恵器も古墳に伴うものではなく、古代の資料と考えられる。

泉古墳群の範囲内に内包される領毛A遺跡と領毛B遺跡は、過去に須恵器と土師器が採集された古代の遺跡である（第15図）。また小字「領毛」を「領家」の誤記として、莊園領主との関わりも論じられている（見島1962）。今回出土した古代須恵器は、古墳時代ではなく古代の当地の動向と関連する資料であろう。

8号墳および9号墳については、この試掘調査の成果を受けて、本発掘調査を実施することになった。本発掘調査は令和元年度に実施し、本書執筆段階ですでに現地調査を終了している。本発掘調査の成果には試掘調査の知見とは異なる点もあるが、それらの詳細については、前述した試掘調査出土遺物の概要も含めて、令和2年度刊行予定の泉9号墳本発掘調査報告書で報告する予定である。

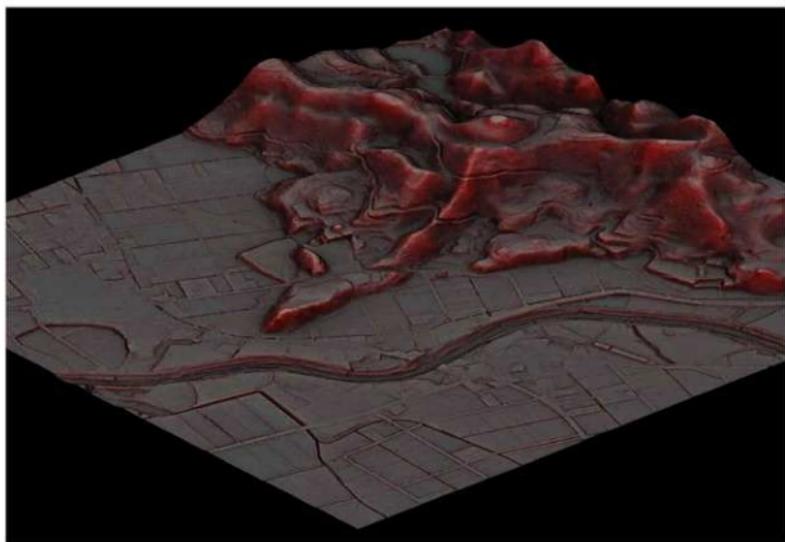


第17図 泉古墳群赤色立体地図 (S=1/5,000)



第18図 泉古墳群墳丘分布図 (S=1/5,000)

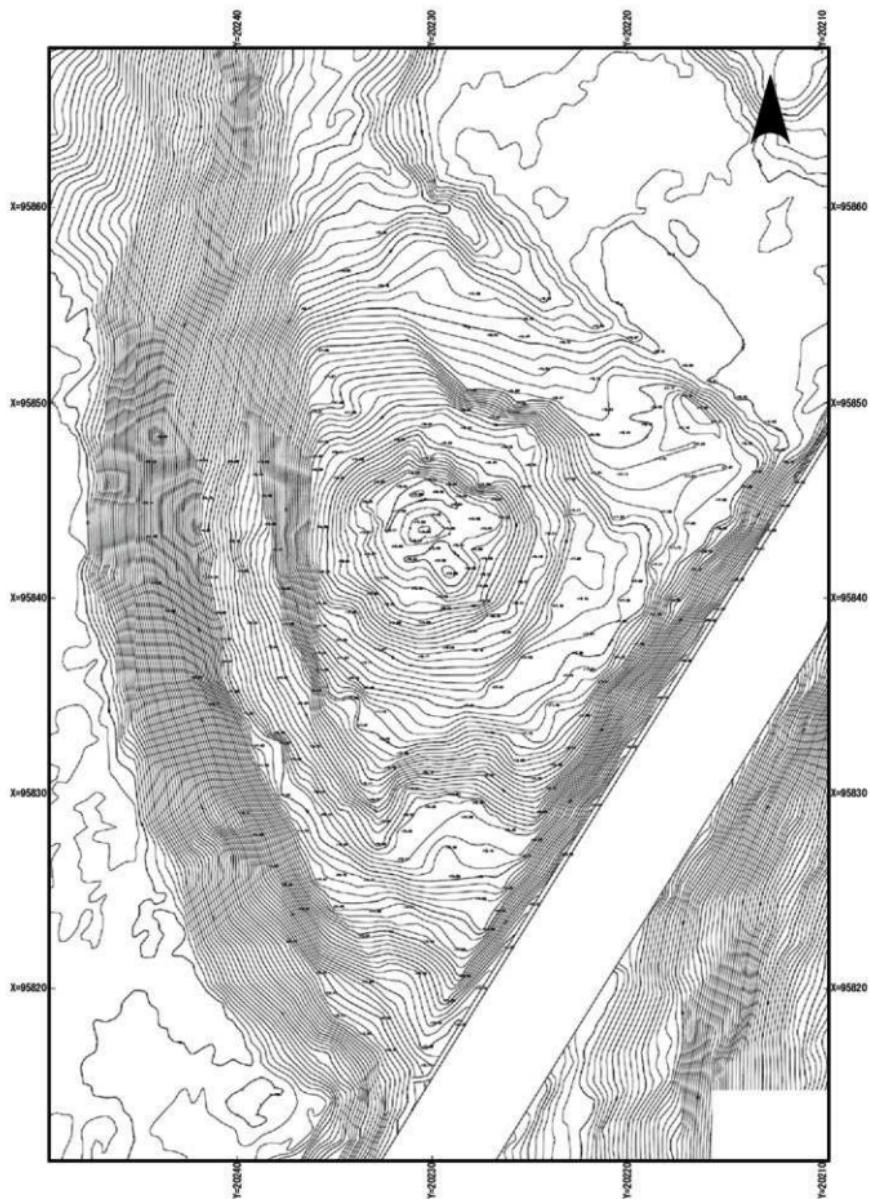
各墳丘の位置と墳形は氷見市2002に準拠し、赤色立体地図を基に修正を行った。



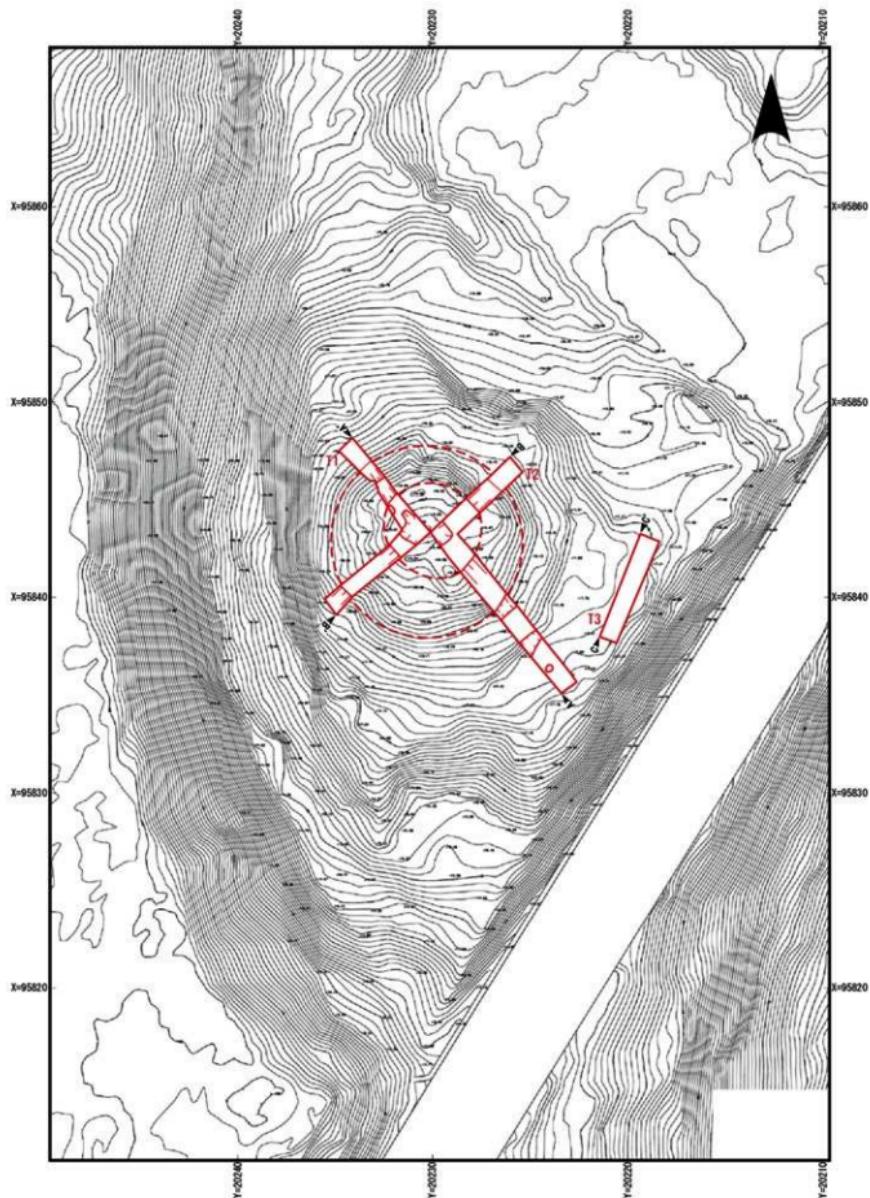
第19図 泉古墳群赤色立体地図（俯瞰・北西から）



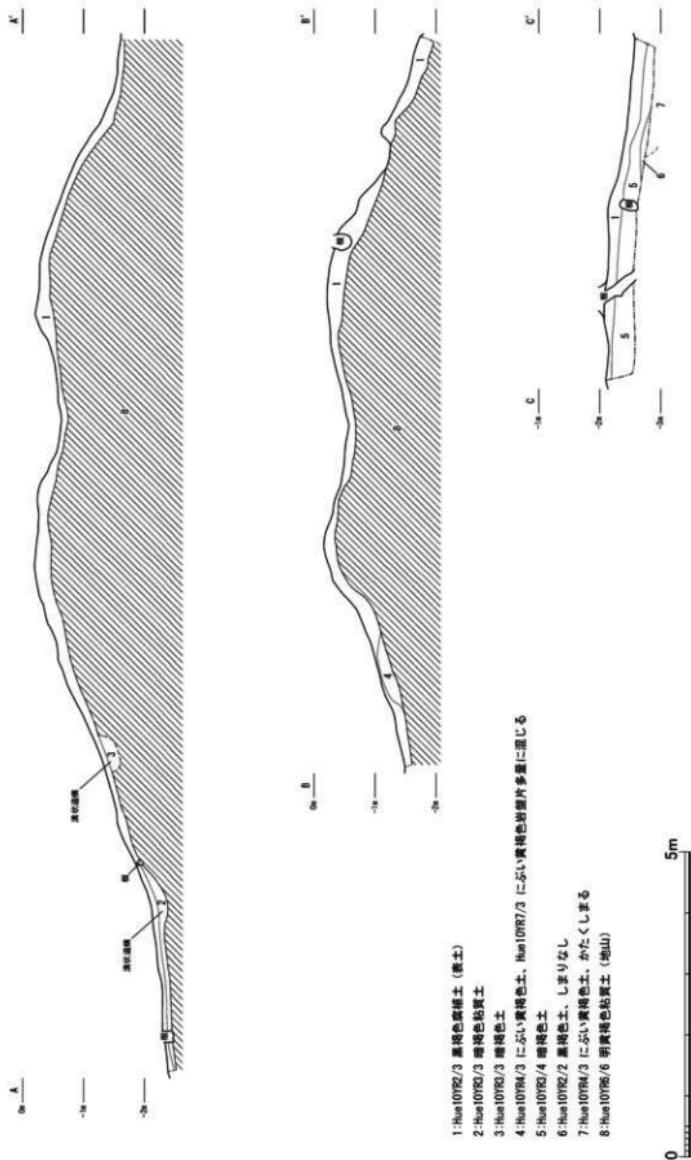
第20図 泉8・9号墳赤色立体地図（S=1/500）



第21図 泉8・9号墳平面図 (S=1/250)



第22図 泉8・9号墳試掘トレンチ平面図 (S=1/250)



第23図 泉8・9号墳試掘トレンチ土層断面図 (S=1/80)

付章 森寺城跡追加測量調査の成果

第1節 遺跡の概要（第24図）

森寺城跡は、氷見市北部を流れる阿尾川中流左岸の丘陵上に所在する。阿尾川は石川県との境に位置する市最高峰石場山（標高513m）を水源とし、約11.5kmで富山湾に注ぐ河川である。城跡が立地するのは、阿尾川流路のほぼ中間点にあたり、川が狭隘な谷から平野へ抜ける直前の地点に位置する。城跡からは東南方向への視界が開け、氷見市市街をはじめ、射水市・富山市の海岸部までを見通すことができる。

森寺城跡が所在する阿尾川流域（八代谷）には、国境の荒山峠を介して越中と能登を結ぶ荒山街道が通る。戦国期にこの荒山街道は重要な役割を担っていたと考えられ、街道沿いには森寺城のほか、阿尾城（氷見市阿尾）、荒山城（氷見市小滝・中能登町原山）、勝山城（中能登町芹川）が築かれている。また、森寺城跡を貫いて、森寺から北の角間に経て能越国境の柴峰（石場山）に至る街道が通過している。

森寺城跡は、中世の史料では「湯山」と記される。能登畠山氏によって16世紀初め頃に築かれたと推定され、その後上杉謙信、佐々成政の支城となり、成政が羽柴秀吉に降伏した天正13年頃に廃城になったと考えられる。城跡の範囲は南北約1.1km、東西約0.4kmにわたる。中心部の標高は約160mである。氷見市では最大規模の山城であり、多くの石垣を用いている点に特徴がある。二の丸へ登る大手道には石垣・石敷・側溝を揃えた幅約3mの通路が確認されており、天正9年頃佐々成政による改修によって設けられたとされる。また、特に登り口で石垣が崩された状況から、前田利家によって破却（城わり）が行われたと推測される。なお、昭和48年（1973）1月30日には城跡の中心部分が氷見市指定史跡となっている（氷見市2002・氷見市教育委員会2000・2001・2010）。

第2節 調査に至る経緯（第25図）

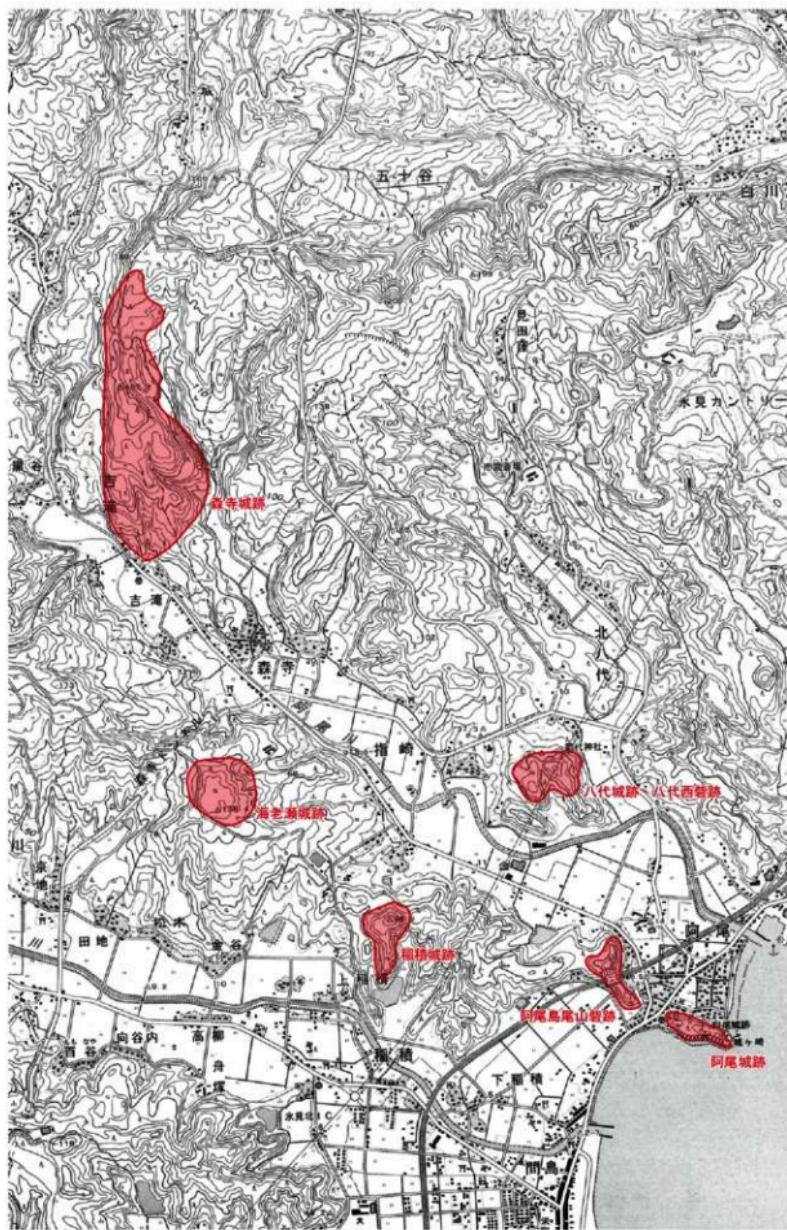
氷見市教育委員会では、平成7年度から継続して森寺城跡の調査を実施してきた。初年度に地名や縄張りの確認を行った後、平成8～13年度に測量調査を実施した。また測量の補足調査として、平成8・9年度と平成13年度に試掘調査を実施した。その後、平成16年度にも試掘調査を実施し、平成21年度には新たに確認された遺構について測量調査を実施した。

平成8・9年度の試掘調査は、搦手口地区と三角点地区、本丸・二の丸地区の3か所で実施した。調査では石垣を伴う土塁について、栗石（裏込石）の存在を確認した。また、本丸・二の丸地区的土塁の外側で空堀を検出した。平成13年度の試掘調査では、二の丸大手口横で確認された空堀の経路、形状を確認した。これらの調査では中世土師器皿を中心に、白磁や珠洲焼、越前焼などが出土した。15世紀の珠洲焼も出土しているが、主体となるのは16世紀の後半から末頃の資料である。

平成16年度の試掘調査は、二の丸へ登る大手道の経路と構造を確認することを目的として実施した。調査では、石垣・石敷・側溝を揃えた幅約3mの通路が確認された（氷見市2002・氷見市教育委員会2000・2010）。

さて、平成25年に佐伯哲也氏が『越中中世城郭図面集Ⅲ』で発表した森寺城跡の縄張り図には、平成21年度までに測量した図面には含まれていない部分があった（佐伯2013）。そのため、平成28年度より、新たに森寺城跡の追加測量調査を実施することとした。対象地は城跡の南端部である（第25図）。

平成28年度は調査の準備作業として過去の測量図のデジタル化を行った。平成29年度より追加測量調査を開始し、平成29年度にはA地点、平成30年度にはB地点の測量調査を実施した。また、令和元年度にはそれぞれの地区の不足部分について測量調査を実施した。



第24図 森寺城跡および周辺の城跡位置図 (S=1/25,000)

第3節 調査の概要（第25図）

平成29年度から令和元年度の3か年で実施した追加測量調査の対象地は、城跡の南端部である。先述したとおり平成25年、佐伯哲也氏が『越中中世城郭図面集Ⅲ』で発表した森寺城跡の縄張り図には、平成21年度までに測量した図面には含まれていない部分がある（佐伯2013）。具体的には、城跡南西の通称「野崎屋敷」と呼ばれる郭から自然地形を経て南端に構築された切岸と、城跡を貫く街道南側の横堀2基である。

調査にあたり、「野崎屋敷」南側をA地点、街道沿い南側をB地点とし、それぞれ周辺地形を含めて測量調査を実施した。なお測量調査は、平成29年度のA地点と令和元年度の補足測量を朝日コンサルタント株式会社、平成30年度のB地点の測量調査を株式会社中部コンサルタントにそれぞれ委託した。

第3節 調査の成果（第26～30図）

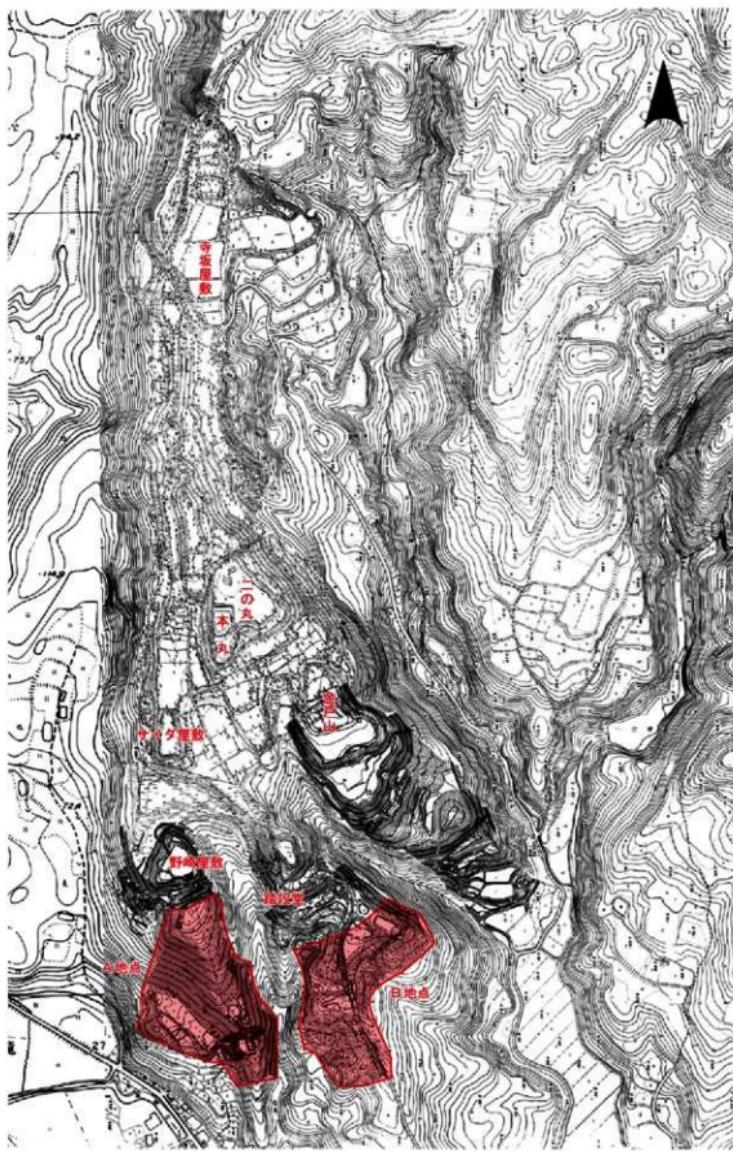
A地点は、通称「野崎屋敷」の南方にあたる。「野崎屋敷」の南側には尾根筋を断ち切る巨大な二重堀切が設けられている。二重堀切から南南東方向、自然地形の尾根筋を下った地点に小平坦面があり、その南端に尾根を断ち切る切岸が構築されている。

B地点は、通称「階段堂」と呼ばれる地点の南方にあたる。「階段堂」は森寺城跡の南側大手口で、森寺の集落から登ってきた街道がこの地点で大きく曲げられ、土壘、堅堀と街道を見下ろす曲輪で防御されている。「階段堂」南側、街道の東側にあたる地点に、尾根筋に沿って長さ36m、幅15m程の長方形の平坦面がある。その南東端にはおおよそ10m四方のわずかな高まりがあるが、ここにはかつて鉄塔が建設されていた基礎部が残る。その高まりの下方、長方形の平坦面に直交し、尾根を断ち切る方向に、長さ約70mの横堀が設けられている。また、その横堀の延長線上、街道の西側には、街道に直交する方向で横堀が設けられている。横堀の長さは約30mで、西側はそのまま谷に落ち込む。

A地点の切岸、B地点の横堀は、いずれも城跡南側を防御する遺構である。佐伯哲也氏によれば、「野崎屋敷」の二重堀切から「階段堂」、「金戸山」南側の堅堀・切岸までが第1防衛ライン、A地点の切岸からB地点の横堀、「金戸山」に通じる尾根道最南端の切岸までが第2防衛ラインだという。主郭のほか、「野崎屋敷」や「サイダ屋敷」など独立性の高い郭群が天正4年以前の畠山氏の時代に築かれたものであるのに対し、城跡南側に設けられた二重の防衛ラインは、天正10年以前に上杉氏ないし織田政権によって構築されたものとされる。

今回作成した全体平面図（第30図）を見ると、A地点「野崎屋敷」南側の切岸と、B地点「階段堂」南側の2基の横堀が、ほぼ一直線に並ぶ状況を読み取ることができる。両地区の遺構が連動して構築され、城跡南側の防衛ラインを形成しているものと考えられる。

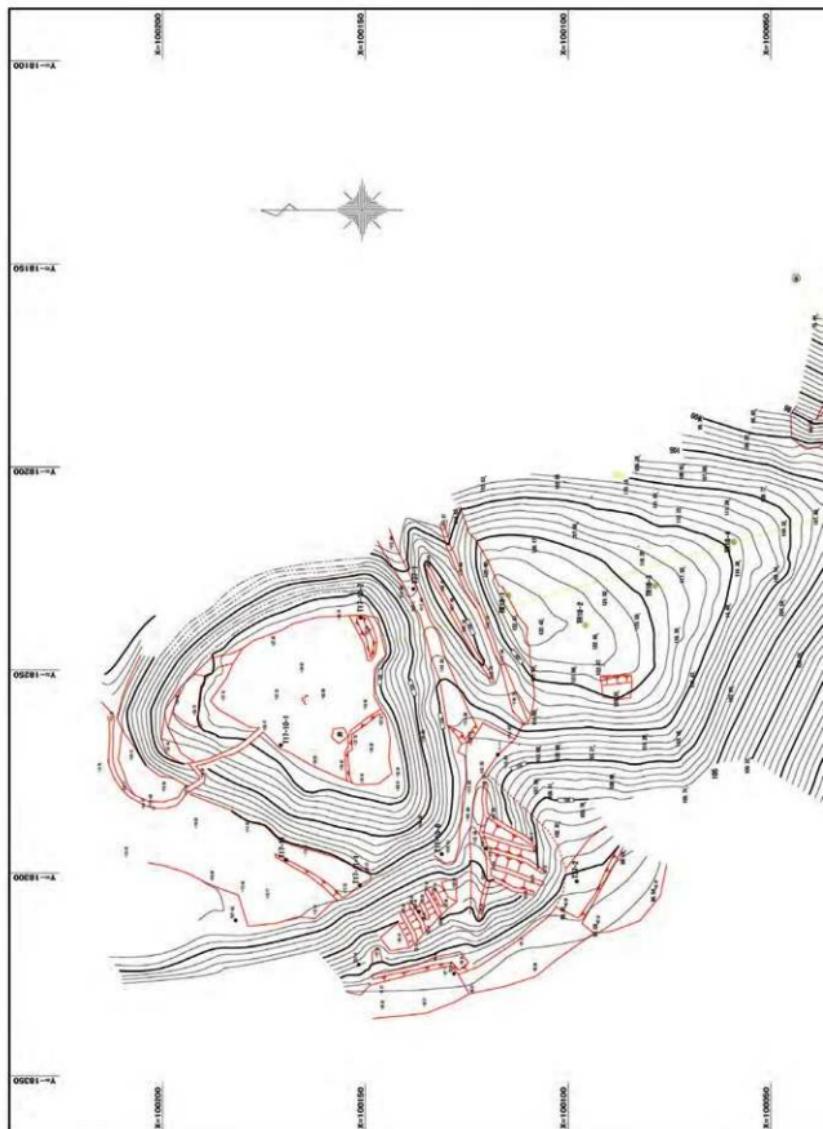
平成28年度から実施してきた森寺城跡の追加測量調査については、令和元年度でひとまず終了となる。これまでに測量調査を実施した範囲は、南北約1.25km、東西約0.4kmにおよぶ。広大な森寺城跡では、主要な地点での試掘調査は実施してきたものの、いまだ未調査の遺構も多い。近年の氷見市内の丘陵地では、イノシシによる掘り起こしの被害も多々あり、森寺城跡もその例外ではない。今後も継続して調査を実施し、城跡の保護と活用に努めていきたいと考えている。



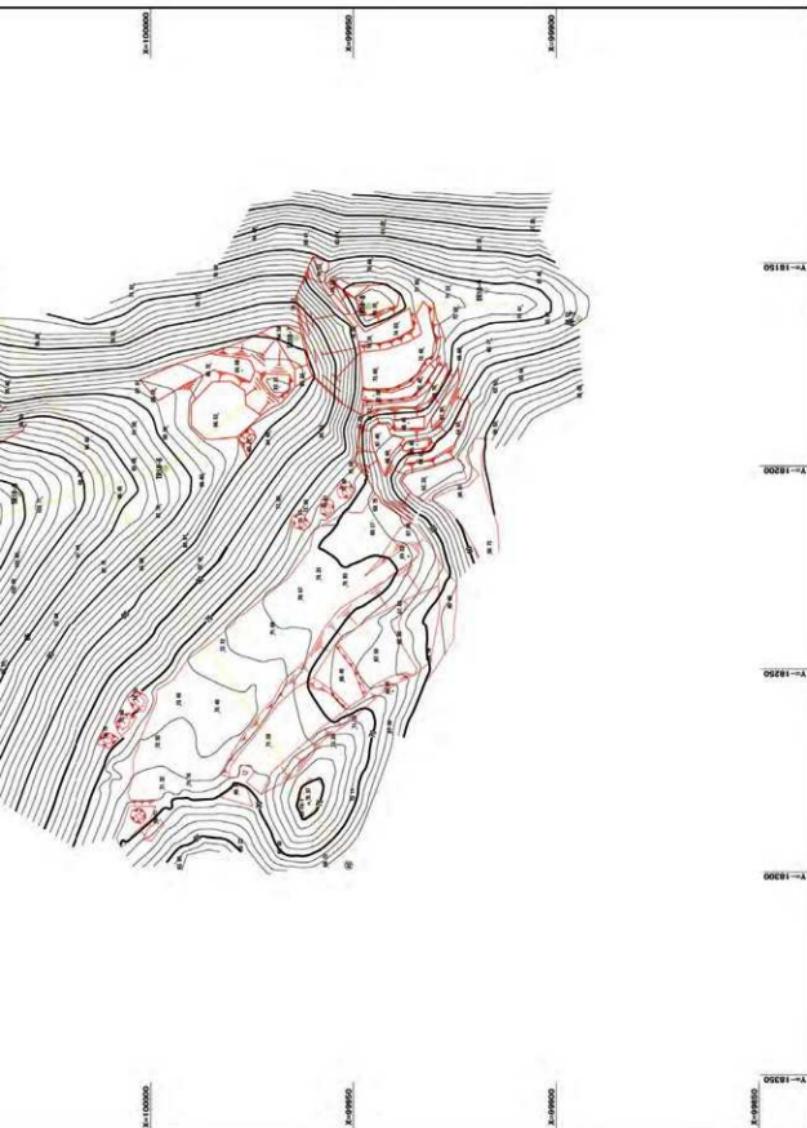
第25図 森寺城跡追加測量調査対象地位置図 (S=1/6,000)

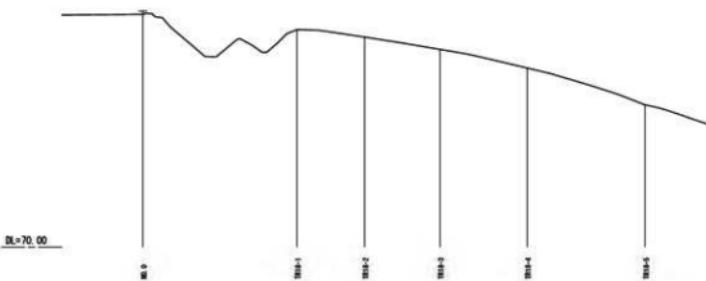
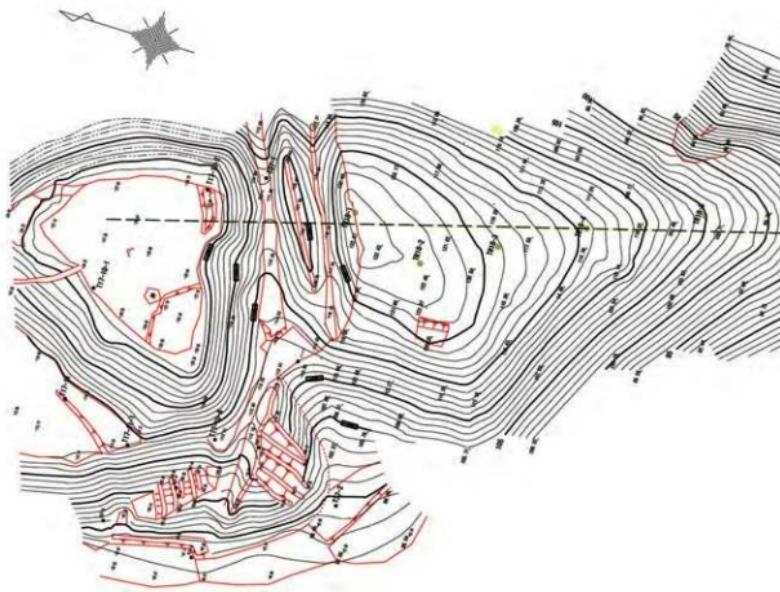
引用・参考文献

- 公益財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2017『中村大橋遺跡 発掘調査報告－国道415号道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ』富山見文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第72集
児島清文 1962『水見市地名考』水見報知新聞社
- 佐伯哲也 2013『越中中世城郭図面集Ⅲ 一西部（水見市・高岡市・小矢部市・砺波市・南砺市）・補遺編一』桂書房
- 鶴尾正一 1936『郷土史料』
- 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1964『富山県水見地方 考古学遺跡と遺物』水高歴史クラブ報告書 No.1
- 西井龍儀・林寺巖州・大野究 1988『水見市園カンデ窯跡』『大境』第12号 富山考古学会
- 水見市 1963『水見市史』
- 水見市 1999『水見市史』9 資料編7 自然環境
- 水見市 2000『水見市史』6 資料編4 民俗、神社・寺院
- 水見市 2002『水見市史』7 資料編5 考古
- 水見市教育委員会 2000『森寺城跡 一試掘調査の概要一』水見市埋蔵文化財調査報告第30冊
- 水見市教育委員会 2001『水見の山城』郷土説本14
- 水見市教育委員会 2008『水見市遺跡地図[第三版]【改訂版】』水見市埋蔵文化財調査報告第51冊
- 水見市教育委員会 2010『中村城跡Ⅰ・森寺城跡Ⅱ』水見市埋蔵文化財調査報告第56冊
- 水見市教育委員会 2012『鞍川E遺跡I 市道鞍川雲峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告（1）』
水見市埋蔵文化財調査報告第60冊
- 水見市教育委員会 2019『水見市内遺跡発掘調査概報Ⅶ 平成29・30年度試掘調査の概要』水見市埋蔵文化財調査報告第70冊

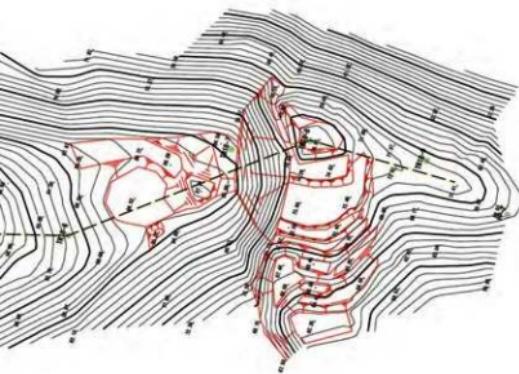


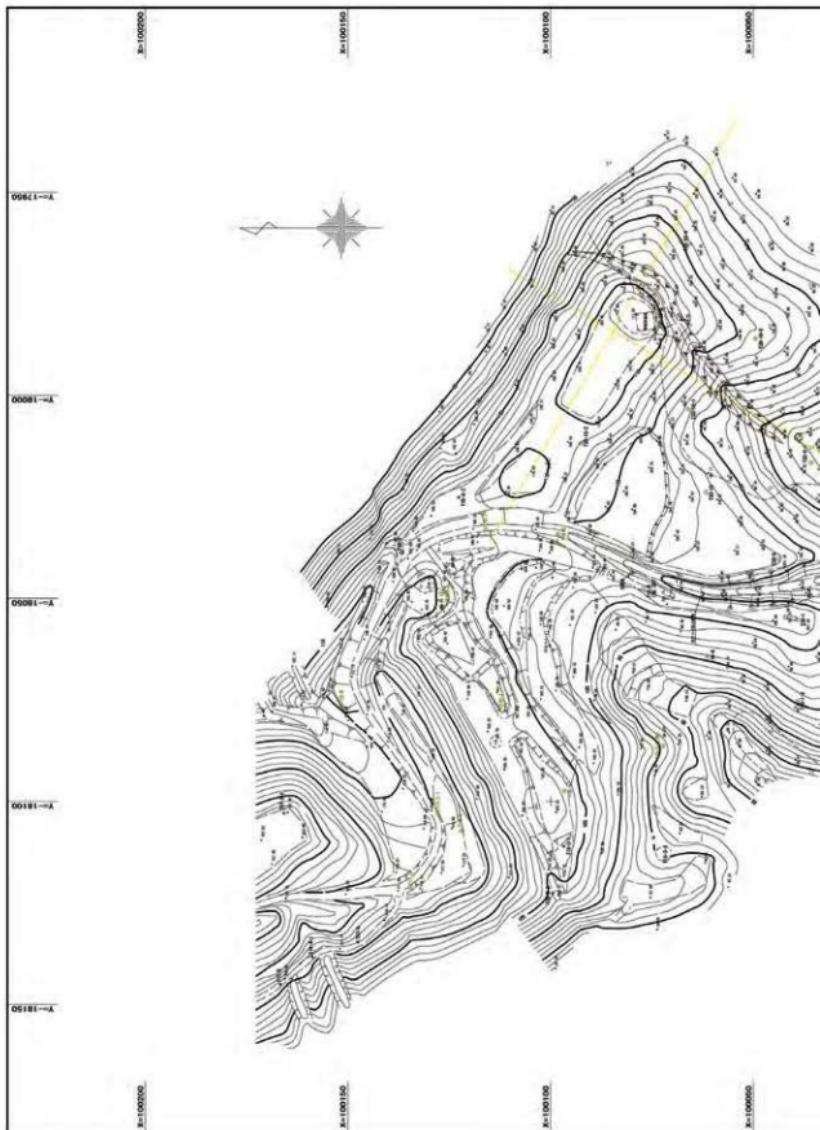
第26図 森寺城跡追加測量A地点平面図 (S=1/1,200)



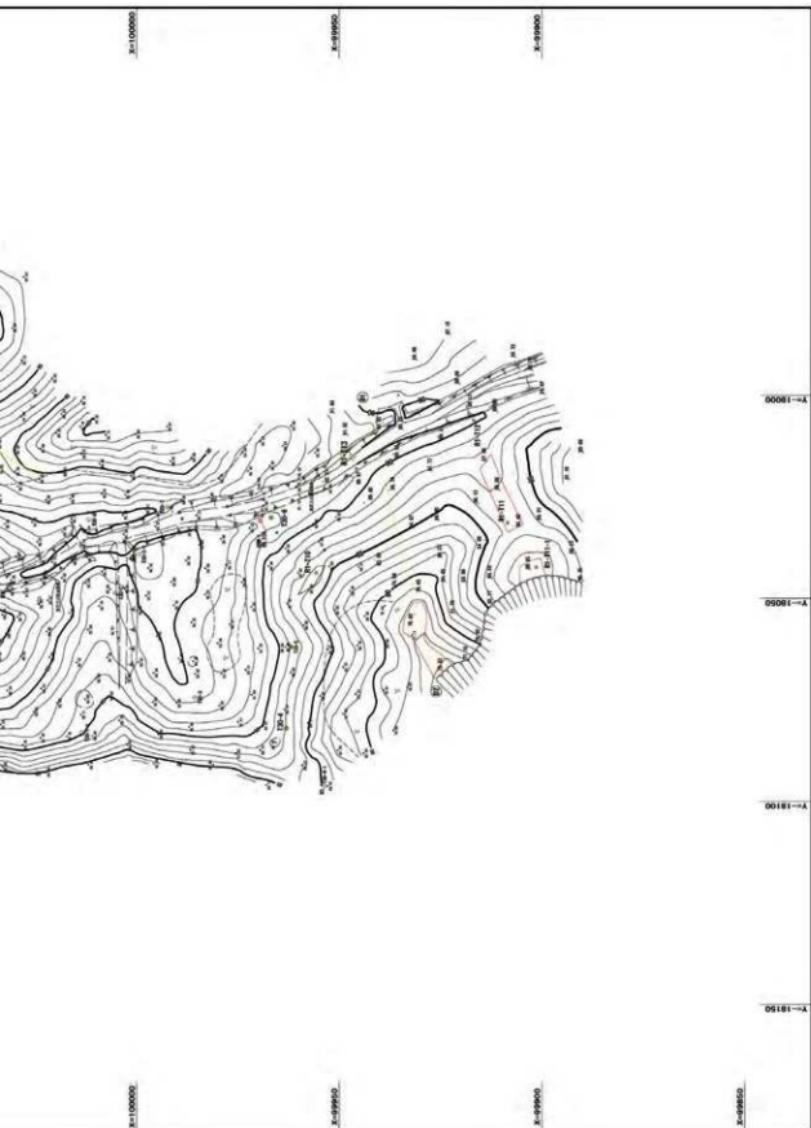


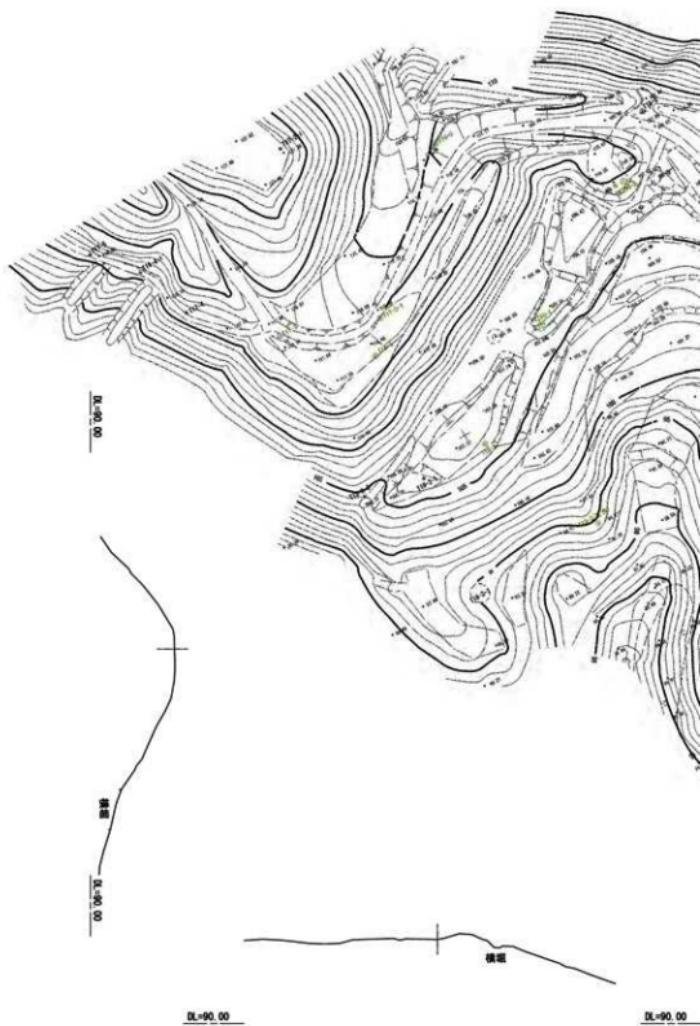
第27図 森寺城跡追加測量 A地点断面図 ($S=1/1,200$)



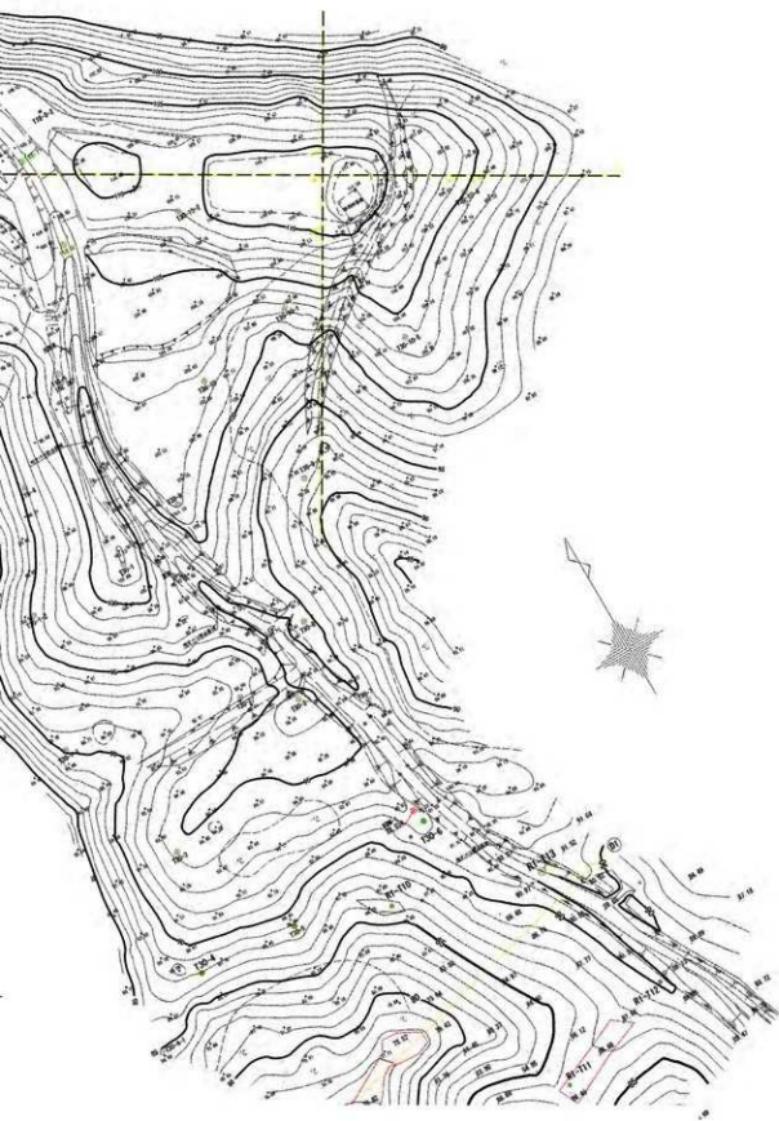


第28図 森寺城跡追加測量B地点平面図 ($S=1/1,200$)



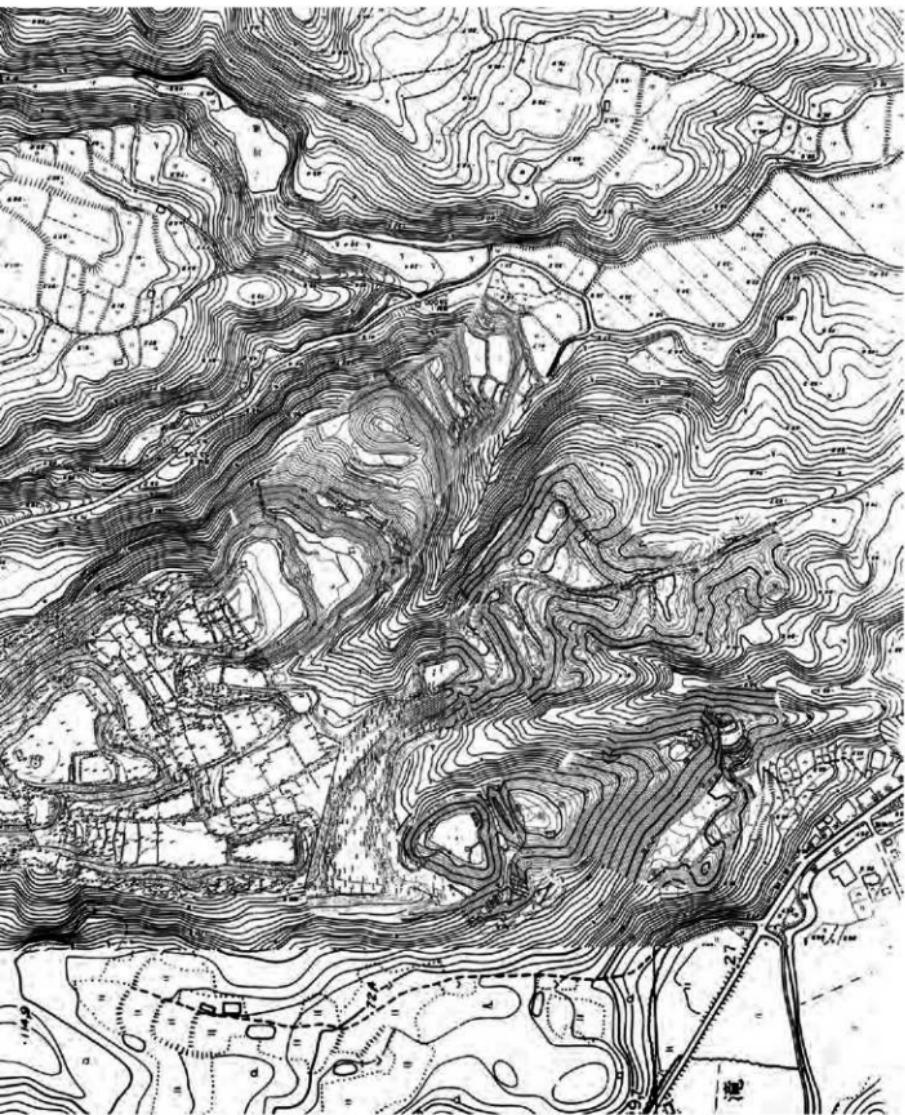


第29図 森寺城跡追加測量 B 地点断面図 ($S=1/1,200$)





第30図 森寺城跡全体平面図 (S=1/4,000)





1. 園カンデ窯跡上空から旧布勢水海と朝日長山古墳を見る（南西から）



2. 朝日長山古墳上空から園カンデ窯跡を見る（北から）

カラー図版1 園カンデ窯跡空中写真（1）（平成29年3月撮影）



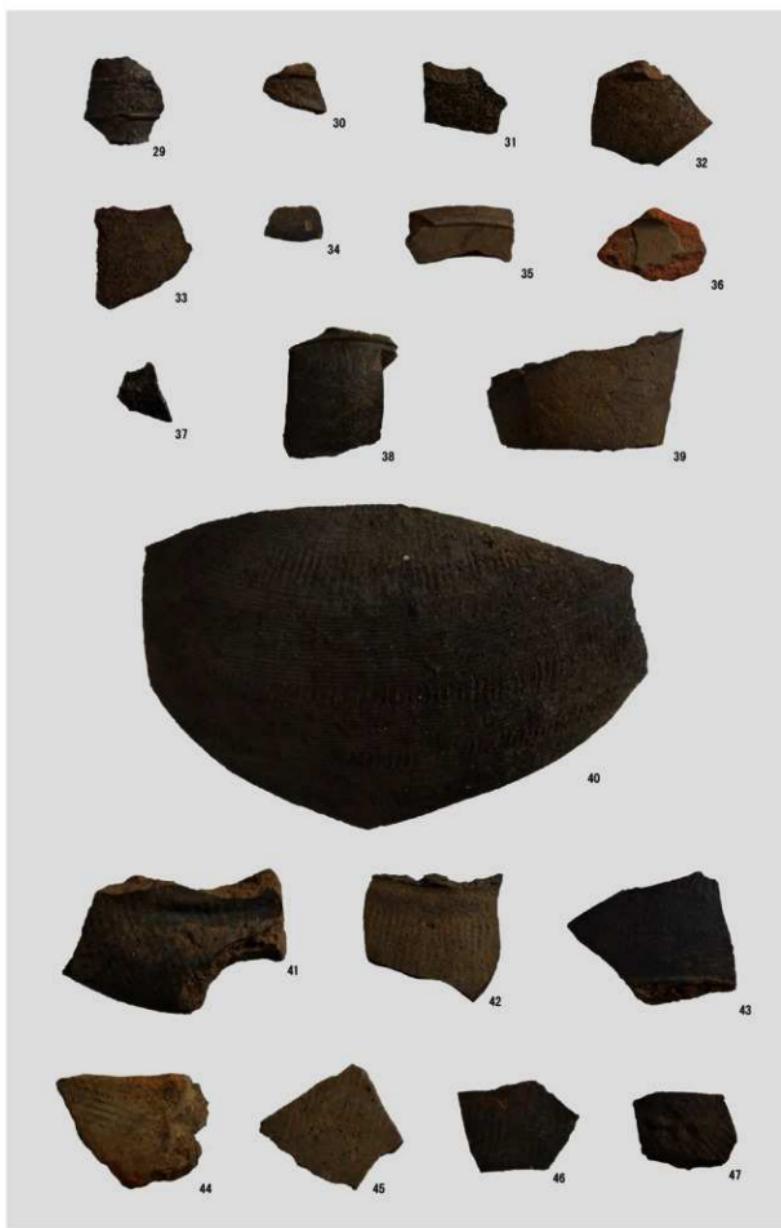
1. 園カンデ窯跡近景（西から）



2. 園カンデ窯跡近景（上から）



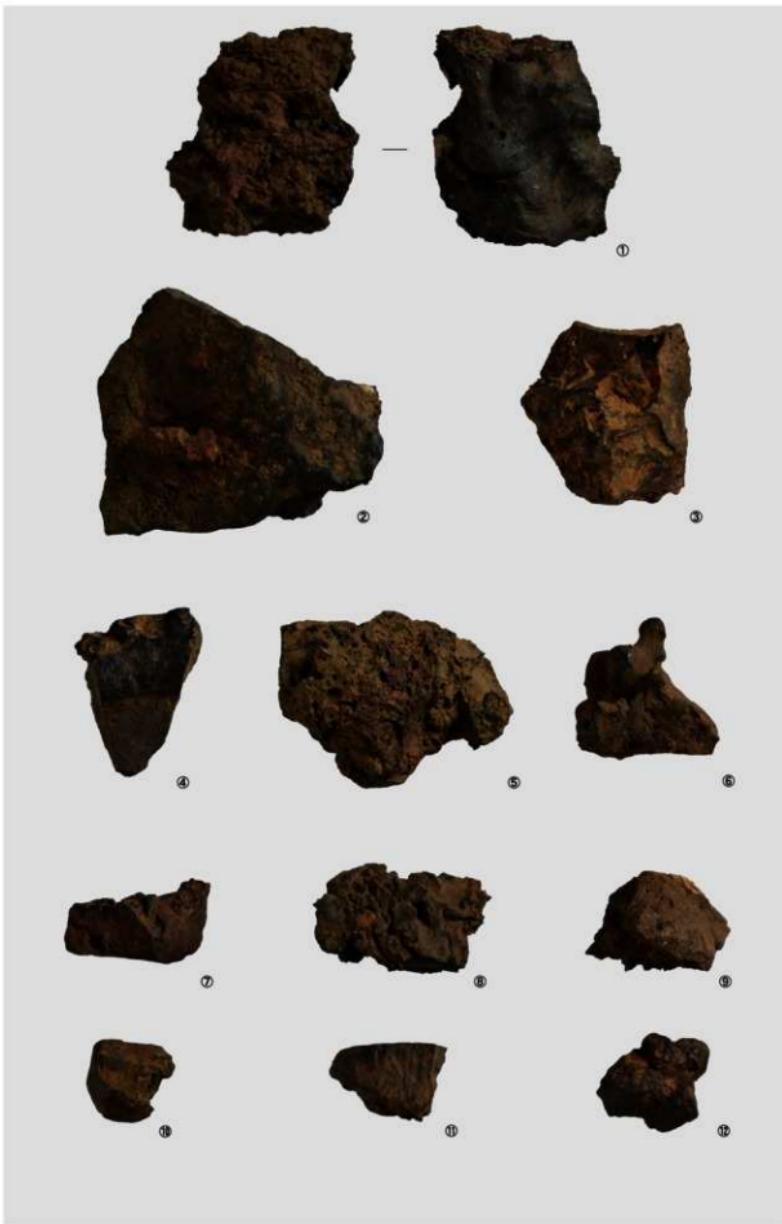
カラー図版3 園カンデ窯跡遺物写真（1）（S=1/3）



カラー図版4 園カンデ窯跡遺物写真（2）(S=1/3)



カラー図版5 園カンデ窯跡遺物写真（3）（S=1/3）



カラー図版6 園カンデ窯跡遺物写真（4）(S=1/2)



1. 泉 8・9号墳遠景（東から）



2. 泉 8・9号墳遠景（西から）



1. 泉古墳群近景（北西から） 手前が泉8・9号墳



2. 泉8・9号墳近景（上から）



図版 1 遺跡周辺空中写真 (1) (1947年米軍撮影) 国土地理院
1: 國カンデ窯跡 2: 朝日貝塚 3: 朝日長山古墳



図版2 遺跡周辺空中写真（2）（1963年撮影） 国土地理院 泉古墳群



1. 調査対象地近景（南から）



2.T1 完掘状況（北から）



3.T2 完掘状況（北西から）

図版3 園カンデ窯跡試掘調査（1）



1. 作業風景



2. 調査対象地工事実施状況（1）
(令和元年10月、北西から)



3. 調査対象地工事実施状況（2）
(令和元年10月、南西から)

図版4 園カンデ窯跡試掘調査（2）



1.T1 完掘状況（西から）



2.T2 完掘状況（南から）



3. 作業風景

図版5 朝日貝塚（平成29年度調査地区） 試掘調査



1. 調査対象地近景（北から）

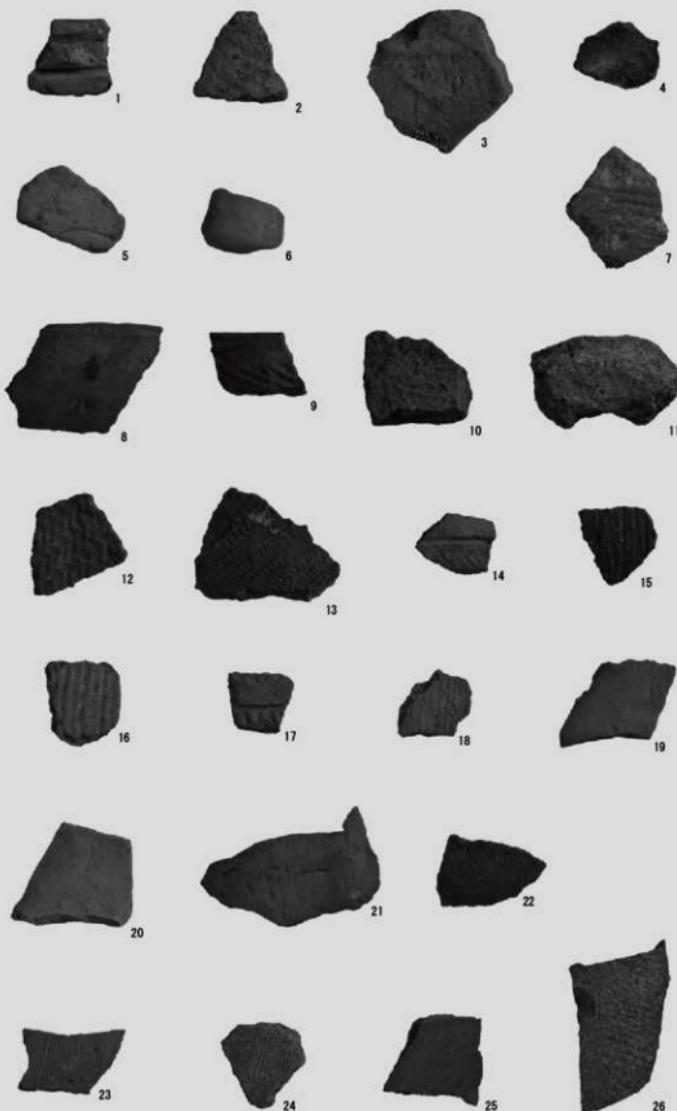


2. 伐根部土層断面（東から）

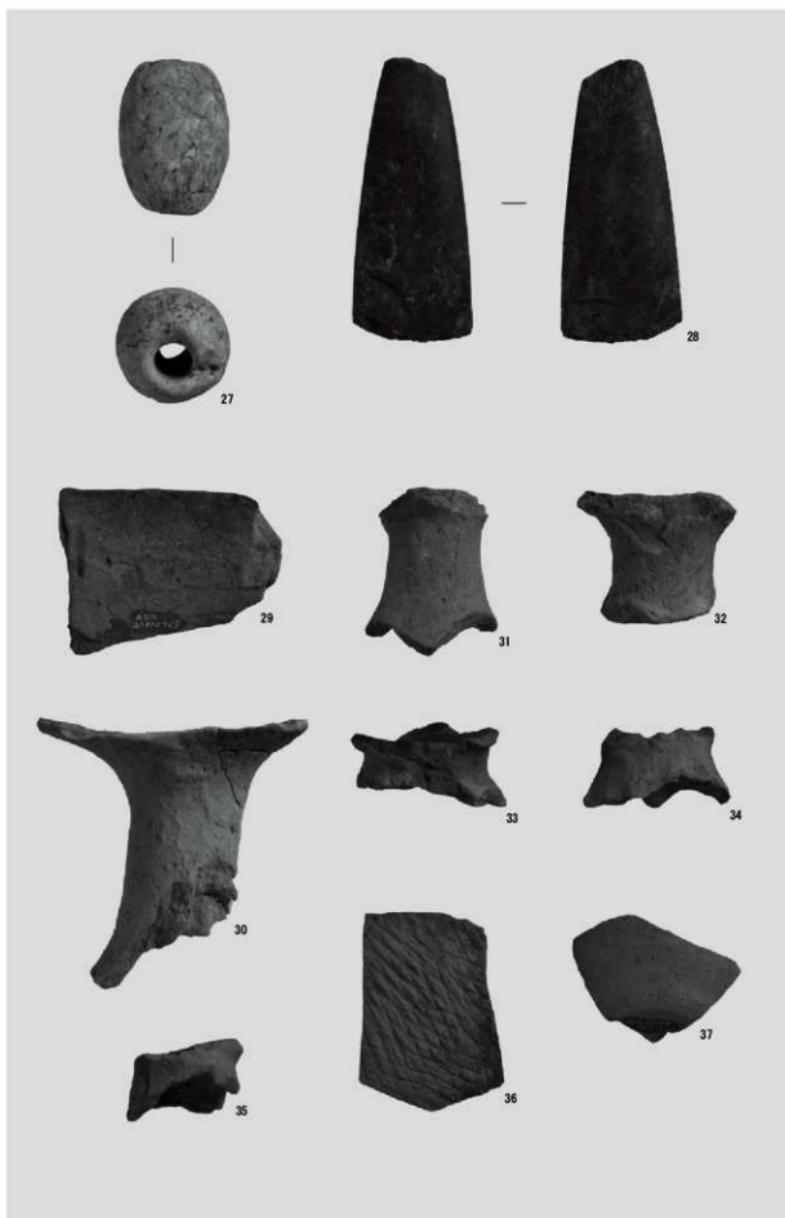


3. 作業風景

図版6 朝日貝塚（平成30年度調査地区）試掘調査



図版7 朝日貝塚遺物写真（1）(S=1/2)



図版8 朝日貝塚遺物写真（2）(S=1/2)



1. 調査対象地近景（北東から）



2. 9号墳墳頂部土坑検出状況
(北から)



3. 9号墳溝状遺構検出状況
(東から)

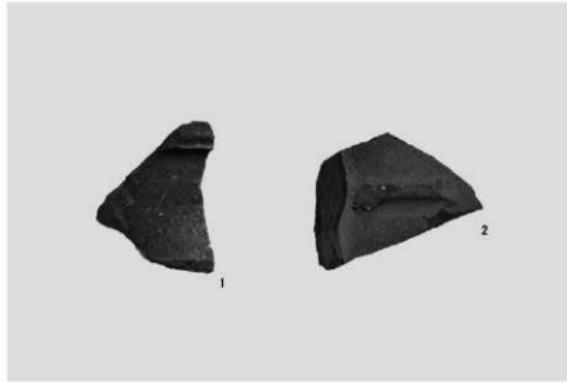
図版9 泉古墳群（8・9号墳）試掘調査（1）



1.T3 完掘状況（北東から）



2. 作業風景



3. 出土遺物 (S=1/2)

図版10 泉古墳群（8・9号墳）試掘調査（2）

報告書抄録

ふりがな	ひみしないいせきはつくつちょううさかいほうはち							
書名	永見市内遺跡発掘調査概報Ⅸ							
副書名	園地内急傾斜地崩壊対策工事に伴う園カンデ窯跡試掘調査ほか 付 森寺城跡追加測量調査の成果							
シリーズ名	永見市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第71冊							
編著者名	廣瀬 直樹							
編集機関	永見市教育委員会							
所在地	〒935-0016 富山県永見市本町4番9号 永見市立博物館 TEL0766(74)8231							
発行年月日	2020年3月19日							
ふりがな 所 取 遺 跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°°'	東經 °°°'	発掘期間	発掘 面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
園カンデ窯跡	永見市園	16205	151	36° 49' 55"	136° 59' 00"	20180606 ～ 20180608	36 m ²	試掘・確認調査
朝日貝塚	永見市朝日丘	16205	056	36° 51' 00"	136° 59' 00"	20171128 20180605	9.0m ² 6.0m ²	試掘・確認調査
泉古墳群	永見市泉	16205	042	36° 51' 54"	136° 56' 20"	20190611 ～ 20190614	32.3 m ²	試掘・確認調査
森寺城跡	永見市森寺	16205	019	36° 54' 26"	136° 57' 28"	～	～	測量調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
園カンデ窯跡	窯跡	古墳	なし	古墳須恵器・鉄津		調査対象地で窯跡は確認できなかった。		
朝日貝塚	貝塚	绳文・弥生	なし	绳文土器・弥生土器		近代以降の擾乱を確認。開発実施。		
泉古墳群	古墳	古墳・古代	円墳・溝・土坑	古代須恵器		9号墳で周溝とみられる溝状遺構を確認。試掘調査後、本発掘調査実施。		
森寺城跡	城館	中世	横堀・切岸	～		城跡南端の横堀・切岸の測量調査を実施。		

要 約

平成 29 年度から令和元年度に水見市教育委員会が実施した試掘調査の報告である。

園地内急傾斜地崩壊対策工事に先立ち実施した園カンデ窯跡の試掘調査では、事前に実施した磁気探査で窯跡の存在が推測された範囲に試掘トレーニチを設定して調査を実施した。調査対象地で遺構は確認されなかつたが、古墳時代の須恵器と窯壁片、鐵滓が出土した。

平成 29 年度と 30 年度に個人住宅の建設に先立ち、朝日貝塚の国史跡指定範囲の北側で実施した試掘調査では、いずれも近代以降の土地区画整理などによって搅乱を受けていることが確認された。近代以降の陶磁器類等に混じり、縄文土器・弥生土器・古代須恵器・中世珠渦焼などが出土した。

一般国道 415 号（谷屋大野バイパス）道路新設工事に伴う泉古墳群（8・9 号墳）の試掘調査では、9 号墳（鶏塚）の主体部で、大正年間に地元青年団が実施した発掘坑とみられる土坑を検出したほか、周溝の可能性がある溝状遺構を検出した。遺物としては、古代須恵器が出土した。

森寺城跡では、平成 28 年から令和元年度にかけて城跡南端部の追加測量調査を実施した。測量したのは、城跡の南側を防御する切岸と 2 基の横堀である。これら切岸と横堀がほぼ一直線に並び、城跡南側の防御ラインが形成されていることが確認された。

令和 2 年 3 月 17 日印刷

令和 2 年 3 月 19 日発行

水見市埋蔵文化財調査報告第 71 冊

水見市内遺跡発掘調査概報Ⅷ

園地内急傾斜地崩壊対策工事に伴う園カンデ窯跡試掘調査ほか

付 森寺城跡追加測量調査の成果

編集・発行 水見市教育委員会

〒 935-0016

富山県水見市本町 4 番 9 号

水見市立博物館

☎ 0766 (74) 8231

印 刷 菊華堂印刷株式会社

